

# 六供遺跡群 No.7

前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



# 六供遺跡群 No. 7

前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



H-10 出土銅形模造品

2 0 1 3 . 2

前橋市教育委員会



H-10号住居跡全景（北西から）



H-10号住居跡 鋳形模造品出土状態

口給 2



D-1 遺物出土状態（北から）



六供遺跡群No.7 出土石製模造品（上が H10-1、下が W1-4）

## 例 言

1. 本書は、前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う六供遺跡群No.7の発掘調査報告書である。
2. 調査は、前橋市立地図整理第一課の委託を受け、前橋市教育委員会文化財保護課（福田貴之）の指導のもと山下工業（代表取締役 山下 尚）が実施した。
3. 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡所在地 群馬県前橋市六供町 317-2, 317-3, 320-1, 320-3, 320-5

遺跡コード 24H55

調査対象面積 400m<sup>2</sup>

調査期間 平成24年12月12日～平成24年12月29日

整理期間 平成24年1月4日～平成24年2月21日

調査担当者 櫻井和哉（山下工業株式会社）

4. 発掘調査資料及び出土遺物は、一括して前橋市教育委員会に保管してある。

5. 本書の編集執筆は1を福田貴之（前橋市教育委員会）が行い、その他を櫻井和哉が担当した。また、DTP処理・遺物写真撮影を山際哲章が行った。

6. 発掘作業及び整理作業に関わった方々は以下のとおりである。（五十音順・敬称略）

【発掘作業】 稲田康夫 岡田和夫 柳澤礼子 神山正男 斎藤茂二 白石敬一 遠原忠男 曲澤年雄  
水口眞江子 山口八代江

【整理作業】 柳澤礼子 永島香織 堀地文子

7. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々や機関からご助言・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）

青木利文 女屋和志雄 神谷佳明 川道亨 鈴木徳雄 高橋清文 田中降明 永井哲教 長井正欣 南田法正

日沖剛史 宮本久子

## 凡 例

1. 表紙に付日本地図センター発行の陸軍迅速図（フランス式彩色地図）を編集・加工し使用した。

2. 掃図に建設省国土地理院発行の1:25,000地形図を編集・加工し使用した。

3. 遺跡、全体図におけるX・Y値は、平面直角座標X系（日本測地系）に基づく座標値である。

4. 掃図中に使用した北は座標北である。

古墳時代居跡・H 土坑・D ピット・P 溝・W

5. 遺構の略称は以下のとおりである。

古墳時代居跡・H 土坑・D ピット・P 溝・W

6. 測量・実測図の縮尺は原則として以下の通りである。

【遺構図】 住居跡・土坑1:60 溝跡1:80

【遺物図】 环・高环 1:3 その他の土器 1:4 石製品1:2

7. 遺構・遺物の計測値は、( )は推定値、[ ]は残存値で示し、単位はcmで表記した。

8. 土器等胎土の夾雜物については代表的なものを以下の通りに省略し記載した。

白色粒子・白粒子 黒色粒子・黒粒 鉄斑斑・鉄粒 角閃石・角閃石 白色針狀物質・白針 チャート・チャート  
赤色チャート・赤チャート

9. 遺構・遺物図の編掛け等は以下の通りである。

カクラン範囲：■ 灰釉・粘土・燒土範囲：■ 炭・灰範囲：■ 還元焰燒成：■

## 目 次

口絵1

## 掃図目次

## 表 目 次

Tab.1 掃査区位置図 ..... 1 Tab.1 遺構計測表 ..... 12

口絵2

Fig.2 六供遺跡群No.7全体図 ..... 3

Tab.2 遺物観察表 (1) ..... 13

例言・凡例・目次

Fig.3 群馬県における摺形縛

Tab.3 遺物観察表 (2) ..... 14

I 調査に至る経緯 ..... 1

の出土事例 ..... 11

II 遺跡の立地と環境 ..... 1

Fig.4 H-1～3号住居跡 ..... 15

図版目次

III 調査の方法と経過 ..... 2

Fig.5 H-4～9号住居跡 ..... 16

PL.1 西区全景、H-1・2・4・6・9・10

IV 基本層序 ..... 2

Fig.6 H-10号住居跡 ..... 17

PL.2 D-1・3・6・7号土坑

V 遺跡の概要 ..... 2

Fig.7 D-1・3・6・7号土坑

PL.3 出土遺物 (1)

VI 成果と課題 ..... 7

W-1・2号溝 ..... 18

PL.4 出土遺物 (2)

引用・参考文献

Fig.8 出土遺物 (1) ..... 19

PL.5 出土遺物 (3)

写真図版

Fig.9 出土遺物 (2) ..... 20

報告書抄録・奥付

Fig.10 出土遺物 (3) ..... 21

Fig.11 出土遺物 (4) ..... 22

## I 調査に至る経緯

平成 25 年 11 月 22 日付けで前橋市長山本 龍（区画整理第一課）より埋蔵文化財発掘調査業務依頼が前橋市教育委員会に提出された。教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託するよう前橋市に回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、市教委の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することとなり、同年 12 月 10 日付けで前橋市と民間調査組織である山下工業株式会社との間で業務委託契約が締結され、同年 12 月 12 日に発掘調査が開始された。

なお、遺跡名称「六供遺跡群№7」（遺跡コード：24H55）の「六供遺跡群」は区画整理事業名を採用し、「№7」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

## II 遺跡の立地と環境

六供遺跡群№7 は、標高約 98.5m、JR 前橋駅から南方約 1.1km の地点に位置し、地形的には利根川左岸の前橋台地上に形成された低地帯の中にある微高地上に立地する。今回の調査では古墳時代の住居跡が多数検出されたが、近隣の六供下堂木Ⅱ遺跡において Hr - FA 下から水田遺構の検出される状況を踏まえれば、周囲に広がる低地帯の開発を前提に設営された集落の一端を示すものとして差し支えないであろう。前橋台地上の低地帯の開発は、櫛島川端遺跡・公田東遺跡・公田池尻遺跡などの事例にみられるように、古墳時代前期には普遍的に開始されるものと思われる。周辺地域では広瀬川右岸に沿って広瀬・朝倉古墳群が展開し、主要な古墳として前期では前橋八幡山古墳・天神山古墳・朝倉Ⅱ号墳、後期では前橋二子山古墳・金冠塚古墳等が挙げられる。古墳時代においてはおよそこの様な古墳に象徴される首長権を媒介とした労働編成をもとに灌漑体系の整備や開墾が行われ漸移的に水田可耕地を拡大してゆく過程であると想定される。本遺跡もこうした地域の歴史的な脈絡の中で成立した集落遺跡であると位置づけることができるであろう。



Fig.1 調査区位置図

### III 調査の方法と経過

委託調査個所は区画整理事業に伴う道路予定地であり調査対象面積は400m<sup>2</sup>である。調査区は東西二区画に分割されるため、それぞれ東区・西区と呼称した。調査区のグリッドは日本測地系に基づく六供遺跡群從來の4mグリッドに準拠して設定したが、今回調査よりグリッドの呼称法を変更した。よってグリッド基点における日本測地系と世界測地系の座標値、六供遺跡群旧グリッドと新グリッドの変更点を以下に示しておく。

$$\text{日本測地系} X = 41200.000 \quad Y = -67800.000 \quad \text{旧グリッド} X - (\text{マイナス}) 50 \rightarrow \text{新グリッド} B 50$$

$$\text{世界測地系} X = 41554.964 \quad Y = -68091.829 \quad \text{旧グリッド} Y - (\text{マイナス}) 50 \rightarrow \text{新グリッド} A 50$$

表土除去には0.25バッカボーを使用、遺構測量はトータルステーションを用いて行い、土層断面図等は適宜実測により補った。写真撮影にはアナログカメラ(35mmネガ・ポジ)とデジタルカメラを併用した。調査対象区域は住宅跡地であり、全体的に大きく搅乱を受けていた。しかし、一定程度の遺構の分布が想定されたため、搅乱部分は重機を多用し掘り下げ、なるべく地山・遺構覆土を露出させ全容の把握に努めた。日程的な制約を考慮し、住居跡掘方の調査は原則的にトレチ調査に留め、遺構出土遺物は一括性・同時性の高いもの、遺構の性格・用途を示すものを選別、付番・記録に努め、他は覆土出土遺物として一括して取り上げるなどの形で対処することにした。調査の経過は以下の通りである。平成24年12月12日から調査開始、12月12日～18日の間に表土除去を行う。遺構の掘削・記録は12月12日から開始し、西区は12月26日、東区は12月29日に終了した。調査区埋め戻しを12月27日～12月29日の間に行い調査が完了した。なお今回の調査では古墳時代住居跡12軒、土坑6基、ピット15基、溝跡2条を検出、遺物は古墳時代土器を中心とした遺物収納箱に約10箱出土した。

### IV 基本層序

D-1・D-3・D-6の壁面の観察を基に柱状図を作成した(Fig.2)。I層は表土。II層は西区西側道路脇付近でのみ観察される。このII層とV層との間は漸移層を挟まず明瞭な境界を示している。この事から、W-1がII層中から切り込まれることも考慮すると、調査区内でV層上面を遺構確認とした範囲(調査区西端からH-1中央辺りまで)は、少なくとも17世紀より前に削平を受けていることが推測される。V層からVI層は硬質な細砂層で、V層には浅間山系と思われる軽石が疎らに含まれる。VII層からVIII層は泥炭質で、特にVII層には粗粒の白色軽石の密度の濃い堆積が認められる点が特徴的である。なお、この泥炭質の土層は東区では認められない。VIII層より下は、砂礫層であるXI層を挟むほかは、黄褐色でシルト質の土層が堆積する状況が確認できた。土層の観察の結果、遺跡における基盤層の形成が河川の堆積作用に起因する状況が看取されたが、今回の調査ではその形成時期についてまでは断定し得ない。ちなみにV・VI層は所謂総社砂層(註1)に類似した印象を受け、そうであると仮定すればVII層中の軽石を浅間山系軽石に比定しうる。しかし、調査者の主観的な視点に基づく所見から未知のものに対して安直に判断することは慎むべきであると思われる。よって遺跡地点周辺の地形の形成要因や年代は、今後近隣の遺跡との対比や自然科学的な手法から明らかにされることが望まれる。

(註1) 利根川左岸でも都筑町埋蔵文化財調査事業によって調査された鷹島川端道路や公田東道路などで堆積が確認されている。

### V 遺跡の概要

#### H-1(Fig.4)

**検出状況** 調査区壁際に検出し、北壁側が一部区域外に広がる。住居跡南東隅、南壁と西壁の一部分が搅乱により壊される。床面 掘方を伴いこれを埋め戻して構築する。貼床は明瞭でない。覆土が上方からの荷重で非常に綿まり、この為、床面硬化の状態は明らかにできなかった。周溝はほぼ全周すると思われるが、カマド下では途切れている。カマド(構築状況) 東壁中央南寄りに設置される。ソデは灰白色でシルト質の土を用いて構築される。カマドの床面は平坦で、奥壁をわずかに掘り込んでいる。(使用の状態) 高环を逆位に燃焼部中央3層直上に設置すること



Fig.2 六分遺跡群No. 7 全体図 (S=1/150)

で支脚としている。(廃絶の状況) 灰層直上に天井崩落土が確認されるため、住居跡の廃絶とほぼ同時に壊れていると考えられる。やや左ソデの遺存状態が悪い。**貯蔵穴** カマド右側、住居跡南東隅に位置する(P7)。床面直上から遺物が貼り付いた状態で出土した(Fig.8H1-2)。ピット6基検出。位置や形状からP1・P3～6は主柱穴とするには難しい。P2は主柱穴の可能性がある。**出土遺物** 接合率はそれほど高くないが、床面出土の遺物にも恵まれ、良好な器種組成を示す。高坏が相対的に多く出土し、図示遺物以外に個体識別できる大破片で約7点認められる。器種不明だが須恵器小破片1点確認される。**遺構の年代** 5世紀後半。

#### H-2(Fig.4)

**検出状況** 住居跡北西の一部分を除いて大きく擾乱され壊されている。覆土の残存状況も不良で床面直上出土の遺物(1・4)が検出時に既に露出している状況であった。H-3・8と重複し、H-3を切りH-8に切られる。**床面** 浅い掘方を伴い、残存している範囲では床面の硬化は窺われない。また周溝は検出されなかった。**カマド** 不明。粘土・焼土・灰の散布も確認されない。**貯蔵穴** 摆乱の下、住居跡北東隅にあたる位置に検出(P5)。ピット4基検出。P1～P3は主柱穴であり、P1・P2は攪乱の下から検出した(註1)なおP1の断面には柱痕を確認できる。P4は住居跡中央西寄り、P2・P3との中間に検出した。本住居跡に伴うかは明らかにはし得なかった。床面検出時に覆土中の遺物が一部露出している状況から、同時期かこれを切るものと想定されるが、住居跡出土の遺物との間には明確な年代差は見出せない。なお、覆土上層から遺物が集中して出土している。**出土遺物** 覆土出土の須恵器壺の口縁部破片(Fig.8H2-7)は極めて焼成良好で硬質であり搬入品の可能性がある。**遺構の年代** 5世紀後半。  
(註1) 住居跡の形状、規模はこれら主柱穴の位置からの推定である。

#### H-3(Fig.4)

**検出状況** 大きく削平・攪乱を受けたと思われ、遺構の形状は不整形で浅い。覆土がAs-Cを含む黒褐色土であることから古墳時代住居跡の痕跡であると推測される。H-2と重複しこれに切られる。

#### H-4(Fig.5)

**検出状況** 調査区壁際で北西隅部分のみを検出。大半が区域外に広がる。東壁が攪乱により壊される。**床面** 掘方を伴わない。貼床はなく地山(Ⅲ層)をそのまま床とし軟弱である。また周溝は検出されなかった。**遺構の年代** 5世紀後半。

#### H-5(Fig.5)

**検出状況** 調査区壁際で南東隅部分を検出したと思われる。As-Cが混入する黒褐色土が平面的な広がりを見せることから遺構としたが、周間に攪乱を受け、浅く遺存状態も悪いため住居跡と断定するには不安を残す。**床面** 掘方を伴わない。貼床はなく地山(Ⅲ層)をそのまま床とし、軟弱である。周溝は検出されなかった。

#### H-6(Fig.5)

**検出状況** 調査区壁際で西壁側の一部分を検出した。H-9と重複しこれに切られる。**床面** 浅い掘方を伴いこれを埋め戻して構築する。貼床はなく床面の硬化も認められない。周溝が巡る。**遺構の年代** 遺物の出土はないが、覆土の状態から古墳時代に帰属するものであり、H-9との重複関係から5世紀後半に下限が求められる。

#### H - 7 (Fig.5)

**検出状況** 調査区壁際で検出。大きく攢乱され、西壁・北壁を含む北半分が壊されている。地山（Ⅲ層）と覆土の境界が不鮮明であり、遺構の形状を捉え辛かった。住居跡南東隅が区域外に広がる。H - 8 と重複しこれに切られる。**床面** 土層断面上に見られるように部分的に掘り込みが認められるが、全体的には掘方は伴わない。貼床もなく地山をそのまま床としており、硬化面は認められない。また周溝は検出されなかった。**カマド** 不明。粘土・焼土・灰の散布も確認されない。**出土遺物** 南壁際周辺に土器片の集中があり床面からやや浮いた状態で出土。覆土出土の遺物に樽形甕の破片（注口部）が 1 点確認される。**遺構の年代** 5 世紀後半。

#### H - 8 (Fig.5)

**検出状況** 大きく攢乱され、西壁と北半分が壊されている。地山（Ⅲ層）と覆土の境界が不鮮明であり、遺構の形状を捉えづらかった。H - 2・7 と重複しこれらを切る。**床面** 掘方を伴いこれを埋め戻して構築される。貼床が施されるが（3 層）、硬化した状況は窺われない。また周溝は検出されなかった。**カマド** 不明。粘土・焼土・灰の散布も確認されない。**ピット** 2 基検出。配置は良いが遺構検出において意窓的な側面もあり、また深さや形状を考慮しても主柱穴として認定したい。**出土遺物** (1) は土師器環で床面直上からの出土。覆土出土の遺物に樽形甕の破片（胴部）が 1 点確認される。**遺構の年代** 6 世紀。

#### H - 9 (Fig.5)

**検出状況** 調査区壁際で南西隅部分を検出した。H - 6・P - 13 と重複し、H - 6 を切り P - 13 に切られる。西壁が攢乱により壊される。**床面** 浅い掘方を伴いこれを埋め戻して構築する。貼床はなく床面の硬化も認められない。周溝が巡る。**出土遺物** 覆土中層から口縁部を一部欠く小型甕(1)が正位で出土。**遺構の年代** 5 世紀後半。

#### H - 10 (Fig.6)

**検出状況** 東区北半に検出した。西壁側が一部区域外に広がる。住居跡北半は北壁から東壁かけて攢乱され、広範囲に壊されている。H - 11・12、D - 6 と重複しこれらを切る。**床面** 掘方を伴わない。薄く貼床が施され床面縁部を除いて全体的にやや硬化している状況が認められた。周溝はほぼ全周すると思われるが、カマドの下では途切れている。住居跡北半に南北方向の間仕切り溝が 1 条確認される。南壁際中央付近で L 字形の低い土手状の高まりを検出している。**カマド** (構築状況) 東壁中央から南に寄せて設置される。ソデは灰白色でシルト質の土を用いて構築され、奥壁は住居の壁面をわずかに掘り込んでいる。床面は焚口から燃焼部へかけて平坦で、奥壁際で緩やかに立ち上がる。(使用の状態) 焚口付近の床面、内壁は被熱による変色・硬化が窺われる。床面直上には灰層が形成され、カマド前面に木炭・灰の流出する状況が確認された。支脚は高环を逆位に伏せた転用支脚。燃焼部中央左ソデに寄せて 2 層（灰層）中ほど床面直上に設置している。(廃絶の状況) 灰層直上に天井崩落土が確認されるため、住居跡の廃絶とほぼ同時期に壊れていると考えられる。H - 1 と同様に左ソデの遺存状態が悪い。**貯蔵穴** 東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈し掘り込みが浅い点が特徴的である。上層から中層にかけて遺物がまとめて出土した。**ピット** 床面精査の過程で 6 基検出した。P1・P2a・P2b は形状及び配置から本住居跡に伴う主柱穴である。なお、P1・2a からは柱痕が確認された。また P2b が床面下から検出されたことから、P2a が柱の建替えに伴い新規に掘られたものであることが判明した。P3・P4 は、しっかりととした掘り込みを伴わない。しかし、先述した L 字形を呈する土手状の高まりによって画された内側の壁際付近に位置する点は示唆的である。P5 と住居跡の新旧関係は不明だが、覆土は類似する。**出土遺物** 床面・カマド・貯蔵穴出土の遺物に恵まれ、良好な器種組成を示す。(8) の支脚や (13) の遺物、南壁中央壁際に密集して出土した締物石のように遺棄された状況で出土する遺物もある一方で、全体的には遺物の多くは住居跡中央にまとめて床面直上、または床面から少し浮いた状

態で出土する傾向がある。また、この内、甕や壺などにはつぶれた状態で出土するものも見受けられ、投棄されたような印象も受ける。**遺構の年代** 5世紀後半。

#### H-11(Fig.6)

調査区壁際にH-10・D-6と重複して検出された。地山の直上に綿まつ薄いC混黒褐色土が不整形に広がる状況であり、これを削平された住居跡の痕跡であると判断した。H-10に切られる。D-6との新旧関係はよくわからなかった。**遺構の年代** 覆土の特徴から古墳時代。H-10との重複関係から5世紀後半に下限が求められる。

#### H-12(Fig.6)

H-10の北側に重複して検出された。H-10に切られる。ほとんどがH-10と攪乱によって壊されている。北東隅と北壁の一部を検出し周溝の存在を確認した。**遺構の年代** 覆土の特徴から古墳時代。出土遺物はないがH-10との重複関係から5世紀後半に下限が求められる。

#### D-1(Fig.7)

**検出状況** 南壁の一部が攪乱される。**形態的な特徴** 平面形態は上面では不整円形、底面では長楕円形を呈する。底面にはピット状の窪みが認められ、中段より下で一部オーバーハングする部分がある。また側壁には足掛けピット状の凹みも確認される。**堆積状況** 上層は自然堆積の様相を呈し、綿まりのあるC混黒褐色土の堆積が確認される。下層は黄褐色シルト塊を含む全体的に綿まりのない土で埋もれており、炭化物や直径3~4cm程度の礫の混入が認められる点が特徴的であった。**出土遺物** 中層から土師器甕(1・2)及び甕(3)・礫が転落または投棄された状態で出土したほか、床面直上から小型甕(4・5)が出土した。この内4の土器は正位で置かれた状態であったが、覆土出土遺物の中に同一個体と目される破片が抽出できないことから、元々破損したものを埋納したことが想定される。**遺構の年代** 5世紀後半。

#### D-3(Fig.7)

**形態的な特徴** 平面形態は上面では不正円形、底面では楕円形を呈する。中断より下で一部オーバーハングする部分がある。また、側壁に足掛けピット状の凹みが確認される。**堆積状況** 上層は自然堆積の様相を呈し、綿まりのあるC混黒褐色土の堆積が確認される。また含まれるAs-Cは亜角礫状である。下層は軽石の混入が少なく綿まりのない土層が堆積する点が特徴的である。**出土遺物** 中層から小型甕(1)が正位で出土した。**遺構の年代** 年代を識別できる共伴資料の出土がなくにわかに判じ難いが、小型甕の胎土や調整技法の特徴から概ね5世紀代であると推察される。

#### D-6(Fig.7)

**検出状況** H-10・H-11と重複しH-10に切られる。**形態的な特徴** ほぼ円形を呈する。中段より下で一部わずかにオーバーハングする部分がある。**堆積状況** 自然堆積であると思われる。しかし上層から中層は亜角礫状のAS-Cを多く含む黒褐色土であるのに対し、下層は軽石の混入が少なく、綿まりのない土層が堆積している点が特徴的である。**出土遺物** 床面直上から甕(1・2)、甕(3)がいずれも正位で置かれた状態で出土した。覆土出土遺物の中にこれらの中と同一個体の破片が抽出できないことから、元々破損したものを埋納したことが想定される。**遺構の年代** As-C降下以降、4世紀。

## D - 7 (Fig.7)

**検出状況** 精査の段階で北西隅の一部分を残して他は大きく擾乱される状況が見受けられた。擾乱の深さは遺構確認面から最大で約60cmに達し遺構を損壊していたものの底面の方は残存しているのが確認された。形態的な特徴

隅丸長方形を呈する。北壁・西壁の底面立ち上がり際から20~30cmの高さのところまでがオーバーハングする。

**堆積状況** C混黒褐色土をベースとした地山の砂質土・シルトブロックを多く含む土層が観察されるため、人為的な埋め戻しの可能性が指摘される。**遺構の年代** 出土遺物から概ね5世紀後半であると推察される。

## W - 1 (Fig.7)

**特徴** D - 2と重複しこれを切る。断面形状は逆台形状を呈し、調査区をほぼ南北に縦断する直線的な走向をとる。

**出土遺物** 底面からやや浮いた状態で集石が確認され、これに混ざって瀬戸美濃系の菊皿(1)や皿(2)が出土した。

また混入であるが滑石製の勾玉形模造品(4)が出土している。**遺構の年代** 出土遺物から少なくとも17世紀までは遡ると考えられる。本遺構の廃絶の年代は不明だが、調査区壁土層断面からI層には被覆されている状況が観察される。

## W - 2 (Fig.7)

**特徴** P - 5・8・9と重複し全てに切られる。断面形状は皿状を呈し、ほぼ南北に調査区を縦断する直線的な走向をとる。W - 1と並走することから、その機能・性格的な類縁性が窺われる。**遺構の年代** 年代を示す遺物の出土はない。I層に被覆される。

# VI 成果と課題

## 1 遺構について

### 縄文時代～弥生時代

住居跡覆土や表土から阿玉台式や勝坂式の深鉢小破片が合計3点、H - 3より弥生時代後期窓の口縁部小破片が1点出土したのみで、遺構は検出されなかった。

### 古墳時代～古代

**住居跡** 遺構覆土に遺物が混入するが、今回の調査では4世紀に遡る住居跡は確認されない。検出した12軒の内、年代を確定できた住居跡は、H - 8が6世紀であるほかは、全て5世紀後半の所産である。明確な時期判定のできなかった住居跡も5世紀後半の住居跡に切られるため、これより年代の下るものはない。H - 1・10ではカマドを検出しているが、その他の住居は調査区際での検出や擾乱が著しく火廻の不明なものも多かった。しかし、出土遺物の年代観からも大抵の住居跡にはカマドを伴ったものとみなして差し支えないと思われる。なお、H - 10カマドでは支脚が左ソデに寄せて設置されていたが、これは煮沸貝の二個掛けを示すものであろうか。特筆される住居跡内の検出遺構としてH - 10で検出された「L字形を呈する土手状の高まり」とこれに囲繞されるP3・4の存在が挙げられる。これは入口施設に関係したものと想定したい(註1)。なお、遺構覆土中に6世紀以降の遺物は含まない。また表土出土遺物の観察からも6世紀以降古墳時代後期、古代の遺物はほぼ皆無である。この事は隣接区域の集落の展開を考える上で示唆的である。

**六供遺跡群No 7周辺における集落展開の傾向** 今回の調査では古墳時代の竪穴住居跡が多く確認され、調査区周辺に密集した広がりを見せる様子が窺われた。また年代的に5世紀後半に集中することが明らかとなった。近隣では六供遺跡群No 5・6がこれまでに調査されている。どちらの遺跡も5世紀後半の竪穴住居跡を多く検出している。周辺の微地形を踏まえながら関連付けると、北方約60mに位置する六供遺跡群No 6A調査区は本遺跡と一連の集落であると考えができる。また、西方約70mに位置する六供遺跡群No 5と本遺跡の間には付近の等高線の

観察から浅い竪地が形成される様子が看取される。六供遺跡群№5の調査では住居跡の分布は東へ向かって軒数を減していく傾向があるから、あるいは本遺跡周辺の住居群との間には空閑地が形成されていた可能性もある。なお六供遺跡群№5の西側に六供遺跡群№6B調査区があり、ここにおいても5世紀後半の集落の広がりを確認することができる。またいずれの遺跡も5世紀後半の住居跡がほとんどで、6世紀のものがわずかに存在するほかは、古代に帰属するものがない点が特色として挙げられる。本遺跡も同様に6世紀以降は1軒のみで同様の傾向を示し、遺構覆土や表土の遺物に古墳時代後期・古代の遺物が皆無である点から、近隣に6世紀以降の遺構が少ない様子が窺われる。旧六供村集落が展開した微高地の本遺跡近隣地域では、5世紀後半の住居跡が相当数存在し、一方で他の時期の集落が少ないことが想定される様子は一つの傾向や特色を示すものとして捉えてよいのではなかろうか。

**土坑** 今回の調査では7基検出し、覆土の特徴から全てが古墳時代に帰属すると思われる。この内、掘載から漏れたD-2・5は住居の残骸または住居跡の一部である可能性が指摘される。D-1・3・6・7は特殊な性格をもつ遺構の可能性がある。いずれも深く掘り込まれ、オーバーハングするという意味においてそれぞれ共通するものの、平面・断面の形状は必ずしも一定ではなく、形態的な類縁性や法則性を見出しがたい。また、D-1・6は床面直上に欠損した土器を正面で設置するという行為において共通性が認められるものの両者の遺物の年代には開きがある。この為、今回の調査の中での遺構間の比較の中から用途・機能や性格について明らかにし得ず課題を残すことになった。同様の事例の増加が期待される。

### 近世

**溝跡** W-1は調査区西端で検出し、出土遺物から17世紀に帰属すると考えたものである。調査区西脇を市道が通っており、W-1がこれに近接し並走する点から、この道路に伴うある時期の側溝である可能性が指摘される。この市道は六供地内では南北軸の直線的な走向をとるが、遺跡の北方に鎮座する六供八幡宮<sup>(注2)</sup>に突き当たったところでこれを西に避けて前橋市街地へ向かっている。また、陸軍迅速図や地引絵図においても確認され、迅速図からは現在の県道前橋・玉村線と似通った経路をとっている様子が見てとれることから、その前身にあたると考えられる<sup>(注3)</sup>。W-1がこれに伴う側溝であると考えた場合、出土遺物の年代を考慮すれば、この市道の開削は少なくとも近世には遡ると考えられる。

(注1) 前橋市小神明遺跡群Ⅱでも本住居跡と同様に埋蔵に低い土手状の高まりをもつ住居跡を多数検出している。またその形状から馬蹄形状遺構の名称が与えられており、實際でこれに匹敵されたところにビットをもつ事例も確認される。

(注2) 墓内由緒書には大同三年(808)の創建とされている。

(注3) 昭和23年撮影の米軍撮影空中写真からは、既に現在の県道前橋・玉村線と同一の経路をとることが確認される。

## 2 遺物について

### 六供遺跡群№7出土の土師器について

今回の調査ではH-1・10を中心として5世紀後半の土師器が多く出土した<sup>(註1)</sup>。また、なかには床面出土のものや遺棄といった出土状態良好な状況を示すものもあり、周辺遺跡を含めた地域の土器編年を考える上で活用しうる比較的良好な資料として提示できる。この為、ここでは本遺跡出土土師器の特徴や傾向について主要な器種を中心に概略的に抽出しておきたい。

**环** 図示遺物外を含め出土量が豊富であり、形態的特徴から次のように分類される。

**A類** 丁寧な作りである。所謂内斜口環杯である。口辺部でわずかに膨れるもの(H7-1)とそうでないもの(H10-4)がある。明赤褐～橙に発色し焼成良好。内面は丁寧に斜放射状のミガキを施す。また外面口辺部に斜位のミガキを施すものもある(表土-1)。

**B類** 内斜する口縁をもち、A類に該当しないものを一括した。形態的差異に富む。底部は平底または丸底。H2-1、H10-1・2・3等が該当する。

**C類** 丁寧な作りである。口縁部が内湾する。丸底。内面は丁寧に斜放射状のミガキを施す。図示したのはH10-5のみである。またH10-7はこの類型の环に短い脚部を貼り付けたものである。明赤褐～橙に発色し、焼成良好。A類と形態的差異は著しいものの胎土や焼成が類似している。

**D類** 口縁部を直立または内屈させ、体部との境界が緩く稜を成すもの。平底のものと丸底のもの両方を含めた。H1-1、H2-2、H10-6などが該当し、この類型は中村倉司氏によって擬模倣环と分類されたものに類似する<sup>(註2)</sup>。H1-1は平底で直線的な体部の立ち上がりを見せるものだが、類似のものに六供遺跡群No.6(H-1)、泉沢谷津(1住)、荒砥北三木堂I(2区42住)、荒砥下押切II(8住)などが挙げられる。H2-2は丸底を呈するもので、類似するものに六供遺跡群No.5(H-7)、荒砥下押切II(8住)、荒砥北三木堂I(2区30住)等が挙げられる。

**E類** H1-2のみ。遺跡全体の破片の中でも類するものは見出せなかった。

本遺跡出土の环は概ね以上のように分類される。今回抽出したD類は周辺遺跡を概観しても定量出土が認められるものである。また、具体的な計量は伴わないが、A類とした内斜口縁环が破片も含めて全体の7~8割程度を占める点、また模倣环の共伴がほぼ皆無であった点が特徴的である。

**高环** 脚部形態に特徴が現れる。柱状に近く脚裾が屈折するもの(H1-6)、円錐状に開き脚裾で屈折するもの(H1-5)の二つの類型が主体的である。これに加えてH10-7の様に短脚のもの、H10-9の様に脚裾に段、稜をもつもの、H10-8の様に大型のものがある。後者のもので特に7・9は5世紀後半に出現するものであり該期における高环の組成の特徴を示しているといえる。概して脚部成形時にシボリが加えられ、脚部内面は粘土紐巻き上げの成形痕を削りとるものが多いが、未調整のものもある。

**甕** H1-8、D1-3の様に球胴を呈するものもあるが、大概は胴部中位に最大径を持ちながらも長胴化している。口縁部も外反傾向にあるものの、頭部内面に稜を残し「く」の字の屈曲を見せるものもある。底部はH10-22の様に輪台状を呈するものがあり、破片から見ても定量存在する様である。器外側の調整は、ミガキやハケの施されるものは少なく、ヘラケズリのものが多い印象を受けるが、大抵はヘラケズリ後のナデ調整で磨り消される場合が多い。器内面は概ねヘラケズリ・ナデ調整によって平滑に整えられるが、胴部上半に輪積痕や成形時の指頭痕を残すものも多い。なお、H10-22・23の事例から甕には法量分化している様子も窺われる。小型甕も甕の形態変化と相関し長胴化しているものも見受けられる(H10-19)。

**その他の器種** ほかには咗・壺・瓶等が確認された。咗は小形のものではなく、胴部がやや扁平な球胴を呈するものが多い。口縁部の欠損したものが多いが、大概はH10-10の様に短めで外傾する口縁がつくのである。壺にはH10-15の様な球胴のものと、D1-2の様に底部から体部が直線的に立ち上がり、胴部中位に最大径を持つ形狀のものが確認された。D1-1の壺は、法量・形状から須恵器大甕を模したものと思われる。甕は大型・小型両方が確認される。小型甕は鉢型で單孔のもの(H9-1、H10-17)である。大型のものは、甕形で胴部に張りを残し、底部を大きく削り抜くタイプ(H10-20)のものである。

**胎土** 本遺跡出土の土器の中には結晶片岩を生地に混ぜる個体が散見されるほか(H1-8、H10-21、D1-1等)、ごく微量白色針状物質が混ざる個体も見受けられた(H10-13)。こうした胎土の特徴をもつものは遺跡の中でも客体的である。また、結晶片岩を含むものは藤岡方面を中心とした地域に産地が類推されるものもあり、共同体の自給的な供給圈を越えて流入した可能性が想起される。年代は下るがH8-1もいわゆる有段口縁环<sup>(註3)</sup>であり他地域からの搬入品である。この様に他地域の土器が客体的に集落に混ざる現象に検討を加えることは、古墳時代中～後期における地域経済の実態に迫るうえで注視すべき点であると思われる<sup>(註4)</sup>。

#### 特殊な遺物について

**H-7・8出土の樽形罐** H-7・8覆土からは樽形罐の破片が出土したが、小片2点のため復元実測し図示した。樽形罐の器種の消長と遺構の年代から本来的にはH-7に帰属するものであろう。県内の出土事例は少ないものの、前橋市白藤古墳群Y-6号墳、前橋市荒砥北三木堂遺跡、前橋市泉沢谷津遺跡、前橋市荒砥天之宮遺跡、伊勢崎

市大門遺跡<sup>(註5)</sup>、太田市前沖遺跡、藤岡市温井遺跡等での出土が確認されている(Fig.3)。

H-10出土の車輪石に似た石製模造品 H-10 北東隅床面上から環状の滑石製石模造品が出土した。形状は円形で外径4.0cm、内径2.0cmを測る。その断面形状から車輪石など腕輪形の装身具を模したものと考えられ、鉄形模造品とした。同形のものには茨城県屋代A遺跡61住のものがあり、形状の相違を問わなければ鉄形模造品の類例として、県内に藤岡市白石稻荷山古墳、前橋市上細井稻荷山古墳に事例があるほか、福島県建鉢山遺跡でも確認される。

H-10カマド出土の貝巣穴泥岩 H-10カマド覆土から被熱した貝巣穴泥岩が出土している。貝巣穴泥岩はしばしば古墳時代の竪穴住居跡から出土することがあり、これまで海浜地域との交流が漠然と指摘される事もあったが、その性格や存在意義について不明であった。坂本和俊氏はこれを古墳時代における関東の製塩技法と連携方法の点から説明している。氏は古墳時代における関東の製塩技法が藻塩焼であると仮定し、また藻塩焼において生じた灰を团子状にして運搬し流通させたと考えている。貝巣穴泥岩はこの藻塩焼の過程<sup>(註6)</sup>で混ざったものであり、竪穴住居内で灰團子を水に戻し煮詰めて塩分を得る時に不純物として取り除かれたものと想定している。氏の見解は、考古学的実証性は希薄であったとしても、群馬県のような内陸部の古墳時代社会を考える上でも示唆に富んでいる<sup>(註7)</sup>。

(註1) 年代論においては主に該崩の住跡跡が多く検出されている前橋市荒砥田地区での発掘調査成りや、和泉式期の編年を取り扱った東洋史研究5号を参考とした。

(註2) 中村氏はこれを「意識の上で須弥座を模倣した」とし、須弥座の出現に先行して成立する位置(序)・細分を図っている。難波5世紀中葉から古い地域で昭、熊、高环などの一部の須弥座模倣形態を有する器物の出土事例が散見される。これを坂口一氏が須弥座中山道遺跡の中で「鬼瓦式に先行する」と言ふ「須弥座指向型」の範疇の範囲と指摘したように、湯原の土器群の特徴や位置を示すものであろう。須弥座対象となる須弥座環との距離的差異は著しいものの、本遺跡D型においても同様に内蔵される点や、周辺遺跡の出土事例には梯部に梯級を施す事例もあり、「梯段」の基準をどこに定めるかの問題もあるが、一定の須弥座の影響を認めてよさそうである。

(註3) 本来は玉照城北遺跡や御前敷東遺跡など埼玉県深谷市周辺地域に分布の中心をもつ縄文とされる。

(註4) 例えば中川明氏は古墳時代土器群の類型の中に区域的な分野を見せるものに注目し、その要因を複合再分配という概念から説明した(中川 1989)。また古墳時代後期において難波から他地域の土器が混合して出土する現象について在地酋長層間の交流と共同体内部の葬礼的交換の過程で生じるものとして具体的に説明している(中川 1992)。

(註5) 未報。伊勢崎市小堀歴史民俗資料館に展示。

(註6) 取坂氏は「幾枚」に触れ馬の胸骨に恒常的に塗が必要であったことを指摘しており、内陸部での馬の胸骨に必要な塗の刷拭方法が、考古資料としてどのような観察形態をとるべきかを問題としている。

(註7) 坂本氏は「幾枚」に触れ馬の胸骨に恒常的に塗が必要であったことを指摘しており、内陸部での馬の胸骨に必要な塗の刷拭方法が、考古資料としてどのような観察形態をとるべきかを問題としている。貝巣穴泥岩と製塩技術の関連性は、馬糞焼が想定される埼玉県城北遺跡の住居跡に貝巣穴泥岩の出土が多いことからの着想の趣である。ともあれ、古墳時代後期の都馬糞下において馬糞焼が盛んであったことは理解の事実であり、氏の提示した視点には興味を惹かれるものがある。

### 3 まとめにかえて

近年六供遺跡群以南の前橋南部地域では調査事例が増加しつつある。遺跡個別では調査面積が狭く得られる情報も断片的なこともしばしばだが、次第に様相が明らかになりつつある。前橋南部地域は現況においても水田地帯が広がる地域であり、もともとこの地域が伝統的に水田稲作を主要な生産基盤としてきたことは想像に難くない。前橋市南部地域の前橋台地上の低地帯ではかつては広く条里型地割が認められ、これまでの発掘調査においても As-B下での水田遺構の検出事例が豊富である。近年では古墳時代に遡る水田遺構も随所で確認されている。

古墳時代においても同様にそこに形成される地域社会は水田稲作を基盤に成立していたと考えられる。また、用水路の開闢などを必要とする低地帯の開発は集約的な労働を伴うものであり、水田経営と表裏一体である水利権などの社会的関係は当然一集落で完結するような性格のものではないであろう。それゆえに古墳時代においても本遺跡の立地する前橋台地上には灌漑体系を前提とした広域なネットワークが形成されていたことが想定される。また、本遺跡周辺における低地帯の開発においては、旧利根川流路にあたる広瀬川水系からの引水を前提にしていたと思われるが<sup>(註1)</sup>、これを水源として考えると、六供地区以北の前橋市街地もその開発に関連する区域として視野におさめておく必要があると思われる。なお、前橋市街地における龍海院裏古墳や前橋9号墳の存在は周辺地域の「開発」を考える上で示唆的であると思われる。

ともあれ、古墳時代前期に本格的に始まるであろう前橋台地上における低地帯の開発が、その後の時代を含めてどのように展開し変遷をたどるのか今後具体的に明らかにしてゆく必要があると思われる。これまで蓄積された資

料の精査と整理及び今後の調査成果の活用から、地域の歴史的景観と変遷過程を復元してゆくことが望まれる。今回の調査の成果は断片的である。しかしその一片が地域の開発史や景観史を再構成するための一助となれば幸いである。

(註1) 開口山一氏の古墳時代における前橋台地東部の開発過程に関する検討(開口 2011, 2012)の中で、馬場川と人道の関係について触れている点で、櫛島用水が等高線に沿って走る走向をとる様は当時の八供集落付近の水田地帯における導水方法を考えるとときにおいても示唆的である。

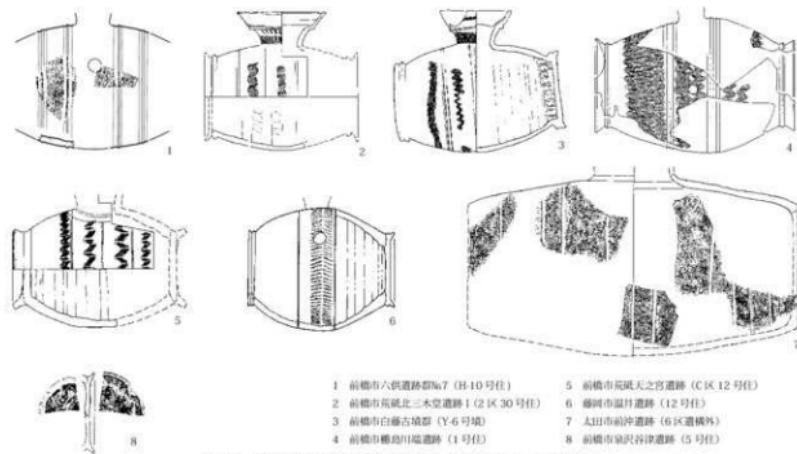


Fig.3 群馬県における転形龜の出土事例 (S = 1 : 6)

#### 引用・参考文献

- 日野賀一 1984 「小鹿原遺跡群」 前橋市教育委員会  
 桥本哲一ほか 1985 「中央八ヶ岳」 前橋市教育委員会  
 当町に史跡は 2008 「前橋城、幕府門丸山遺跡の調査」 前橋市教育委員会  
 神谷利明 1993 「下仁田五反田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 駒崎美樹 1999 「荒城下伊那遺跡」 荒城下伊那遺跡調査研究会  
 多摩美子 1980 「白石古墳群」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 後藤洋一ほか 1996 「群馬縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 第二編 多乎郡平村白石福原山古墳」 群馬県  
 鷹田友義ほか 2010 「八供遺跡調査報告」 前橋市教育委員会  
 町口一也 1988 「藤原宮中「山道跡」」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 町口一也 1991 「荒城下「木堂跡」」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 町口一也 1998 「六供下堂木堂跡」 群馬県埋蔵文化財調査報告  
 佐々木和哉 2012 「古墳祭祀の跡となった集落と古びた祭」 第57回文化講習会資料  
 群玉社文化財調査会  
 下條正之ほか 1996 「藤島・川越遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 下條正之ほか 1997 「藤島・川越遺跡」 田代市道跡・土石堆積地調査  
 斯ナガガル松田株式会社 1988 「生川遺跡」 前橋市埋蔵文化財調査報告書  
 開口山一 2011 「前橋台地東部の「隠れ」を露む二・三の説」『群馬歴史民俗』第32号  
 群馬県史跡研究会  
 開口山一 2012 「上野の「古代聚落群」」 開口山一  
 高島英之ほか 1998 「白山遺跡」 審議会審議調査会  
 1989 「上毛陣・北武藏の古墳時代の土器生產一土器生產と埋葬首飾」 「考古学研究所」第2号 東京大学研究会  
 1995 「関東内部における伴作制成立までの土器種類と歴史的側面」 関東・埼玉県を中心にして「考古学研究所」第4号 東京大学研究会  
 東京大学研究会 1999 「東京土器研究」 第5号  
 仙石秀大ほか 1980 「荒城天之弓遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 仙石秀大ほか 2000 「足利津津野跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 中村利司 1999 「御殿裏裏・戸森遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 新井明彦 2003 「白河跡跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 林久夫 1983 「後園山遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 現野和昌 1991 「十等地古」 第16号 十等地古調査会  
 東日本埋蔵文化財研究会 1993 「第2回東日本埋蔵文化財研究会  
 古墳時代の祭祀-契成式跡の遺跡と遺物-」 第1回  
 前橋市研究会 2006 「文部省「1遺跡」」 前橋市教育委員会  
 真下吉平ほか 1981 「豊川跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 乾田裕之ほか 1990 「西大里山遺跡」 前橋市教育委員会  
 山口達弘 2007 「吹割原遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 山口誠司ほか 2000 「八代跡跡(4号)」 前橋市埋蔵文化財調査報告書  
 古川理二 1993 「八代跡跡」 前橋市埋蔵文化財調査報告書  
 前橋市史記さん会委員会 1999 「群馬県史」 道史編I 朝鮮古代I 前橋市  
 前橋市史記さん会委員会 1971 「前橋市史」 第1巻 前橋市

Tab.I 遺構計測表

遺構 名稱	付帯 施設	グリッド	方位	土輪 (長軸)	副軸	深さ	埋め関係	出土遺物	年代	備考	
H - 1	A128・B128		N - 98° - E	568	[367]	12	縫文、4c 土師、5c 後土師（环・高环・附・小型甕・瓶・大型甕・甕）・編物石	5世紀後半 周溝。			
		P <sub>1</sub>	N - 94° - E	108	[83]	12					
		P <sub>2</sub>	N - 4° - W	68	57	25					
		P <sub>3</sub>	—	44	37	19					
		P <sub>4</sub>	—	69	59	25					
		P <sub>5</sub>	—	58	48	22					
		P <sub>6</sub>	—	48	46	12					
H - 2	A129・B129		N - 106° - E	[308]	[182]	4	H - 3 を切る。 4c 土師、5c 後土師（环・塊・高环・附・小型甕・瓶・甕）・須恵（瓶・甕）	5世紀後半 古墳時代			
		P <sub>1</sub>	N - 16° - E	62	50	[8]					
		P <sub>2</sub>	—	46	—	[17]					
		P <sub>3</sub>	—	28	—	[22]					
		P <sub>4</sub>	—	43	37	38					
H - 3	A129・B128	—	N - 76° - E	75	63	25	H - 2 に切られる。	海生貝殻片（折溢口縫）	古墳時代		
		—	[182]	[102]	0						
H - 4	A129・B129	N - 118° - E	[154]	[132]	15		4c 土師、5c 後土師（环・塊・高环・附・小型甕・瓶・甕）	5世紀後半			
H - 5	A127・B132	—	[153]	[78]	0		4c S字甕	古墳時代			
H - 6	A127・B133	N - 90° - E	[142]	[124]	25		H - 9 に切られる。	5世紀	周溝。		
H - 7	A129・B131	N - 112° - E	[469]	[384]	7		H - 8 に切られる。	5世紀後半			
H - 8	A129・B130	N - 75° - E	427	[319]	9		縫文、4c S字甕、5c 後土師（环・高环・附・小型甕・瓶・甕）	5世紀後半			
H - 9		—	—	46	40	18	H - 2・7 を切る。	4c・5c 土師、6c 土師（环）、須恵（樽形罐）	6世紀		
H - 10	A124・B137	N - 90° - E	[231]	[69]	31		H - 6 を切る。	5c 後土師（小型甕・甕）	5世紀後半	周溝。	
		N - 86° - E	[296]	[659]	15						
		カマド	N - 95° - E	106	79	10					
		貯藏穴	N - 91° - E	136	106	22					
		P <sub>1</sub>	—	38	34	15	H - 11・12、D - 6 を切る。	4c 土師、5c 後土師（环・高环・附・小型甕・小型甕・块・甕・大型甕・甕）・石製模造品・編物石・貝塚内配石	5世紀後半 周溝。主柱穴建替え（P <sub>1a</sub> ・P <sub>1b</sub> ）		
		P <sub>2a</sub>	—	30	24	41					
		P <sub>2b</sub>	—	38	32	69					
		P <sub>3</sub>	—	33	28	27					
		P <sub>4</sub>	—	30	27	10					
		P <sub>5</sub>	—	41	38	26					
H - 11	A125・B138	—	[490]	[192]	0		H - 10 に切られ、D - 6 と重複。	古墳時代			
H - 12	A124・B137	N - 100° - E	[387]	[42]	10		H - 10 に切られる。	5世紀	周溝。		
D - 1	A127・B126	N - 25° - W	130	109	148		4c 土師、5c 後土師（环・塊・高环・附・甕・甕）	5世紀後半			
D - 2	A128・B126	—	[124]	[30]	10			古墳時代	C 褐黒褐色土・柱跡跡の鉢跡から。		
D - 3	A128・B130	N - 17° - W	107	106	121		4c S字甕・土師、5c 土師（小型甕）	5世紀			
D - 5	A129・B130	N - 54° - E	[125]	[32]	8		5c 後土師（甕）	古墳時代	C 褐黒褐色土・柱跡跡の可能性。		
D - 6	A125・B138	N - 50° - W	139	126	111		H - 10 に切られ、H - 11 と重複。	4c 土師（高环・附・甕・甕）、5c 後土師	4世紀		
D - 7	A125・B137	N - 16° - W	[126]	[84]	[84]			古墳時代	楕丸長方型。		
P - 1	A128・B126	—	30	25	44				C 深暗褐色土。		
P - 2	A128・B126	—	30	25	38				C 深暗褐色土。		
P - 3	A127・B126	—	34	23	44				C 深暗褐色土。		
P - 4	A127・B127	—	33	—	48				C 深暗褐色土。		
P - 5	A128・B127	—	34	27	34				C 深暗褐色土。		
P - 6	A129・B127	—	32	27	45				C 深暗褐色土。		
P - 7	A129・B127	—	36	26	57				C 深暗褐色土。		
P - 8	A128・B127	—	27	24	15				C 深暗褐色土。		
P - 9	A128・B127	—	32	30	14				C 深暗褐色土。		
P - 10	A129・B128	—	34	—	44				C 深暗褐色土。		
P - 11	A128・B128	—	24	—	23				C 深暗褐色土。		
P - 12	A128・B128	—	26	—	23				C 深暗褐色土。		
P - 13	A129・B132	—	28	—	18				C 深暗褐色土。		
P - 14	A129・B132	—	48	—	26				C 褐黒褐色土。		
P - 15	A125・B137	—	20	—	[16]				C 褐黒褐色土。		
W - 1	A128・B126	N - 6° - W	[1200]	137	47		瀬戸内美濃系（菊部・留・鉢輪焼）、肥前系（瓶）、不削（基盤）、在地系（カワラケ・焰焼）、板片、5c 土師・石製模造品	17世紀以前 下限は不明。	1層被覆。		
W - 2	A128・B127	N - 12° - W	[1970]	54	6					1層被覆。	

Tab.2 遺物觀察表(1)

出土 遺物 番号	出土 位置	種別	面種	口径	底種	高さ	断土	色調	形態・技術上の特徴	残存率	備考
H-1 1	床直 保直	土師器	环	14.8	4.1	5.3	鉄輪・角閃	明赤褐色	口縁部がすかに内傾。平底。体部外側、底部内面はミガキの下地にヘラケツリ。	ほぼ完形。 底部欠損	被熱による変色、保け。
H-1 2	貯藏印 保直	土師器	环	14.1	—	5.1	鉄輪	焼	内面深らな押痕と粗鈍な反射状ミガキ。	ほぼ完形。 底部欠損	被熱による変色、保け。
H-1 3	覆土	土師器	环	—	—	—	鉄輪・石英	明赤褐色	口縁部はわずか上方に突出。口縁部は内斜。内面斜	破片	周囲内斜に縁が。
H-1 4	覆土	土師器	環	—	—	—	—	—	内面格子目状の丸ガキ。	破片	遺物表面微か。
H-1 5	カマド上	土師器	高环	17.9	(13.9)	14.6	鉄輪	赤	脚部内側状。脚部内面接合部未調整部分にシボリ痕。	4/5	カマド支撑。被熱による変色、器物の芯れ。
H-1 6	床直	土師器	高环	—	—	[9.6]	鉄輪・角閃	焼	脚部柱状。脚部内面接合部未調整部分にシボリ痕。	1/2	—
H-1 7	カマド ソダ	土師器	小型捷	—	4.1	[6.3]	鉄輪・角閃	焼	底部輪状。外面部底下半を差す。	1/4。底 部全周	被熱による変色。
H-1 8	床直	土師器	捷	17.4	8.0	23.7	鉄輪・片岩	焼	口縁部は外反。脚部で輪柱中位に膨大。脚部外側 ミガキの下地にヘラケツリ。	ほぼ完形	脚部外壁剥け。脚部内面器皿開。
H-1 9	覆土	土師器	大型捷	(21.4)	(8.2)	—	鉄輪・石英	焼	口縁部は外傾。	破片	表面磨滅。荒れ。
H-2 1	床直	土師器	环	12.0	—	6.7	角閃	にぶい 赤	口縁部は内傾。横状。外面部底へ底部へヘラケツリ後 丸ガキ。内面粗筋な反射状ミガキ。	完形	底部外壁被熱による擦面剥れ、 保け。
H-2 2	P <sub>4</sub> 覆土	土師器	环	12.8	—	5.5	鉄輪・青白	明赤褐色	口縁部は内傾。丸ガキ。口縁部と体部境界は穢い縫を 成す。内面粗筋な反射状ミガキ。	1/5。口 部・底部欠損	遺物表面微か。底部外壁に黒斑。
H-2 3	P <sub>4</sub> 覆土	土師器	小型捷	(10.1)	—	[11.7]	鉄輪	焼	口縁部は内傾。外面部底下ラッケツリ後ミガキまたはナ ジ。輪柱部にカクレジの下地に差す。	1/3	即の粗製品の可能性もある。 輪柱部に黒斑。
H-2 4	床直	土師器	捷	14.4	—	[14.7]	角閃・石英	にぶい 赤	口縁部は外反。脚部内面は横を成す。長軸に脚部中 位に膨大。	1/3。口 部全周	外面部剥け。口縁部に吹きこぼ れ現。
H-2 5	P <sub>4</sub> 覆土	土師器	环	(24.4)	—	[10.0]	鉄輪	焼	脚部は「く」の字に凹曲。口縁部は外傾。脚部上位 に膨大をつ。	破片	外面部剥け。
H-2 6	覆土	土師器	环	—	—	—	鉄輪	焼	口縁部はむずかに上方に突出。口縁部は内傾。内面 粗筋な反射状ミガキ。	破片	所蔵内斜に縁が。
H-2 7	覆土	直底器	直	(10.3)	—	[4.9]	—	赤	外面部はクロコア。外面に2条の浅い凹縞溝ある。	破片	縞の可能性もある。横成輪め て仰組。融入込。
H-4 1	覆土	土師器	坦	—	—	[10.0]	角閃・石英	赤	やや細かな輪柱。外面部はミガキの下地にヘラケツリ。	1/3	外面部剥け。
H-4 2	覆土	土師器	小型捷	(14.9)	—	[6.2]	鉄輪・石英	赤	脚部は「く」の字状に凹曲。脚部は外反現象。	破片	外面部剥け。
H-4 3	覆土	土師器	捷	(16.2)	—	[21.5]	鉄輪	焼	脚部は外反。脚部内面は横を成す。長軸に脚部中 位に膨大。	1/3	外面部剥け。
H-7 1	覆土	土師器	环	12.6	—	5.6	鉄輪・角閃 石英	焼	口縁部はむずかに上方に突出。口縁部は内面。	4/5。口 部・底部欠損	所蔵内斜に縁が。
H-7 2	覆土	土師器	小型捷	(15.0)	7.0	16.1	鉄輪・角閃 石英	にぶい 赤	脚部は「く」の字状に縫く削曲し。口縁部は外傾。 脚部で輪柱中位に膨大。	1/2。口 部大きさ 欠損	被熱による変色、保け。
H-7 3	覆土	土師器	直	—	6.8	[2.5]	鉄輪・角閃 石英	焼	底部輪柱付。脚部外側へヘラケツリ後ミガキ。	破片。底 部全周	被熱による変色、保け。
H-7 4	覆土	土師器	捷	(16.2)	—	—	鉄輪	焼	外内ロコロナ。外面は凸縫と繩縫造状文。孔径は 約1.2mm程度。	破片 2点から復元実測。	—
H-8 1	床直	土師器	环	14.0	—	3.6	鉄輪・角閃	明赤褐色	口縁部は丸い。脚部は内傾し、2条の縦縞がある。 脚部外側はミガキの下地にヘラケツリ。	4/5	所蔵有段口縫。透底縫等風 化処理の可能性もある。
H-9 1	覆土	土師器	小型捷	15.3	—	10.8	鉄輪	にぶい 淡黄	単化で形成前の登乳。孔径は約2.0mm。内面脚部下 半は削りミガキ。	4/5。口 部・底部欠損	外面に黒斑。
H-10 1	覆土	土師器	环	(13.8)	(2.7)	6.3	鉄輪・赤	明赤褐色	口縁部内側、底部は上昇赤。体部外側はヘラケツ リ後ミガキ。	1/3	外面に磨滅。脚部内面は薄落。
H-10 2	P <sub>2</sub> 覆土	土師器	环	(13.4)	(3.8)	5.6	鉄輪	焼	口縁部内側、底部は上昇赤。体部外側はミガキの 下地にヘラケツリ。	1/4	外面に黒斑。
H-10 3	床直	土師器	坦	14.0	—	6.9	鉄輪・青白	明赤褐色	口縁部は内傾。脚部は内傾し、底部はやや扁平。	4/5	被熱による変色。外面は磨滅。 正品形を含む残存良好で筒形品 4点。
H-10 4	貯藏印	土師器	环	14.1	—	5.8	鉄輪・石英	明赤褐色	脚部は内傾。内面底部立ち上がり際に押痕底筋。	完形	カマド立壁。被熱による変色。
H-10 5	覆土	土師器	环	12.4	—	5.7	鉄輪・角閃 石英	明赤褐色	口縁部内側。内面に押痕。	4/5。口 部・底部欠損	所蔵有段高杯。
H-10 6	覆土	土師器	坦	10.1	5.4	4.7	鉄輪	焼	口縁部内側。平底。	完形	遺物表面微か。
H-10 7	覆土	土師器	高环	12.5	(10.2)	8.6	鉄輪・角閃	明赤褐色	口縁部は内傾。脚部外側ミガキの下地にヘラ ケツリ後ミガキ。脚部は輪柱中位か後輪柱。	1/3。脚 部は現存	透底内面アバタ状に削落。
H-10 8	カマド上	土師器	高环	20.4	—	[15.4]	鉄輪・石英	明赤褐色	脚部円錐形。大きさで輪柱化らしい。脚部内面幾 何形状部分にシボリ痕。	ほぼ完形。	カマド立壁。被熱による変色。
H-10 9	床直	土師器	高环	—	(18.6)	3.0	鉄輪・青白	明赤褐色	脚部中位が凸弧形に横を成す。内面脚部底辺は 削落する。	破片	所蔵有段高杯。
H-10 10	貯藏印	土師器	坦	9.8	—	8.2	鉄輪・砂利	淡黄	口縁部外側に凹縞溝ある。脚部は「く」の字に凹曲し。 口縁部外側反する。底部はむずかに上げ赤。制版外 面はハサウナガキまたはミガキ。脚部内面は柔軟ナ。	1/3	器面磨滅。口縁部は人为的に 打ち落した可能性もある。
H-10 11	覆土	土師器	坦	—	—	—	鉄輪・砂利 石英・青白	赤	やや扁らな輪柱で下膨れ。外面はヘラケツリ後ミガ キ。	破片	外面や中腹縫及び保け。内面 脚部下半部磨滅。
H-10 12	床直	土師器	直	7.7	3.7	10.0	角閃・石英 青白・砂利	淡黄	口縁部外側に凹縞溝ある。脚部は「く」の字に凹曲し。 口縁部外側反する。底部はむずかに上げ赤。制版外 面はミガキの下地にヘラケツリ。	完形	制版外に黒斑。
H-10 13	床直	土師器	直	7.9	—	10.1	角閃・白鉛	焼	口縁部中位で「く」の字に削落し内傾。脚部外側 位はハサウナガキまたはミガキ。脚部内面は柔軟ナ。	完形	外面に白色針状物質をぐく離合。底面半 球形。
H-10 14	床直	土師器	直	—	8.8	[13.9]	鉄輪	明赤褐色	上げ赤。内面底部に輪柱形脚部に「く」の字に削落 する。底部は内傾。	1/4	器面磨滅。軟弱で脆い。

Tab.3 遺物観察表（2）

出土 遺物 番号	出土 位置	種類	基盤	口径	底径	高さ	断土	色調	形態・技法上の特徴	残存率	備考
H-10 15	覆土	土師器	壺	(18.1)	—	[24.3]	鉄粒	明赤褐色	口縁部は中位で斜く段を成す二重口縁。球腹。胴部外面はヘタケズリ後えぎ。	1/2	胴部外面に黒斑。器外側面剥落。残存良好な圓形品目1点。
H-10 16	カマド	土師器	鉢	(20.2)	6.6	16.3	鉄粒・窓附	明赤褐色	口縁部は「く」の字に彫画し、口縁部は外反気味。胴部上位に割りをもつ。外面部胴部上位はヘタケズリ後ナダ。中位は柔軟ナダ。	2/3	外面に黒斑。保け。表面やや剥落。質感。
H-10 17	窓・カ マド	土師器	小型壺	(19.0)	—	9.9	鉄粒・片足	浅黄褐色	鋸形。耳孔で、孔径(1.6)cm。	破片	外面に黒斑。器外側面やや質感。
H-10 18	覆土	土師器	小型壺	11.8	—	[13.3]	鉄粒・初期	褐	口縁部は「く」の字に彫画。口縁部は外反気味。胴部で輪郭中に横大縫。	1/4	被熱による変色。保け。内面輪郭部はアバタ式の削底。
H-10 19	窓・窓穴	土師器	小型壺	14.0	4.6	17.9	鉄粒	明赤褐色	口縁部は「く」の字に彫画。口縁部は外反気味。胴部上位に横大縫。やや上げ渡。調整は内面へラッカズリ・ラッナダ。	1/3	外面に保け。器内面質感。被熱で削底。
H-10 20	覆土	土師器	大型壺	22.4	8.3	23.8	鉄粒	褐	口縁部は「く」の字に彫画。口縁部は外反気味。胴部上位に横大縫をもつ。外面部胴部上位にミガキ。胴部下位でナダ彫くヘタケズリ不規則。内面部下位斜く織立なしが付。	2/3	胴部外面に黒斑。残存良好な圓形品目1点。
H-10 21	町塙穴	土師器	壺	(28.4)	—	[17.0]	鉄粒・片岩	褐	口縁部外反。製造やや粗雑。胴部外面は柔軟ナダ。輪郭部ヘタケズリ。	破片	外面に黒斑。胴部輪郭部の粘土組上端に削底。
H-10 22	覆土	土師器	壺	18.5	6.5	29.4	鉄粒・角凹・ 石面	明赤褐色	口縁部は「く」の字に彫画。口縁部は外反。長脚で輪郭部中央に最大縫。底部輪台状。	3/4	外面に黒斑。内面輪郭部下平アバタ式の削底。残存良好な圓形品目1点。
H-10 23	覆土	土師器	壺	19.0	7.0	33.5	鉄粒・角凹・ ナダ	明赤褐色	口縁部は斜く「く」の字に彫画。口縁部は外反。長脚で輪郭部中央に最大縫。	ほぼ完形	胴部外面に黒斑。内面アバタ式の削底。
H-10 24	床底	石製品	圓形模 造品	9.5	内径 4.0	高さ 0.6	—	—	重さ8.1g。全面に研削・研磨痕。	完形	滑石製。
H-10 25	カマド	窓	瓦窓穴 瓦	直径6.4 3.0	幅 3.6	厚さ 1.0	—	—	重さ8.3g。1m~6mまでの貝殻内窓。	—	被熱による変色。
D-I 1	覆土	土師器	壺	23.6	—	[33.5]	鉄粒・片岩・ 石面・鉄粒・根 小甕	明赤褐色	口縁部は直立立窓に外反。中位に倒縫1道ある。球形。表面鉄錆跡有りで調査時手離。	1/2	調査器具大根模様か。被熱を受ける。外面部胴部中位にタール状のヨゴレ。
D-I 2	覆土	土師器	壺	(17.4)	7.6	30.9	鉄粒・角凹・ 白滑	にぶい チャ	口縁部外反。中位に直縫1道ある。球形。胴部上位にシカリ模様。外面部へラッカズリ後抜いミガキ。ナダ。	1/2口縁部 大きき欠損	被熱による変色。外面に保け。タール状のヨゴレ。器内面輪郭部下平削底。
D-I 3	覆土	土師器	壺	18.0	7.2	28.7	角凹・石面	褐	口縁部外反。圓形的面は斜く縫をもつ。わずかに長脚。胴部中位に横大縫。外面部胴部上位・下位の複合部に沿って柔軟ナダ・ミガキ。内面部胴部上半は柔軟ナダ。	ほぼ完形	外面底部へ胴部保け。タール状のヨゴレ。器内面下平やや削底。
D-I 4	床底	土師器	小型壺	—	6.6	(11.9)	石面	淡黄褐色	口縁部は直立立窓に外反。中位に倒縫1道ある。球形。表面鉄錆跡有りで調査時手離。	2/3	外面被熱による変色。保け。
D-I 5	床底	土師器	小型壺	—	7.4	[5.2]	鉄粒	にぶい 白滑	口縁部・輪郭部中位に横大縫。胴部外面はヘタケズリ後抜いミガキ。	1/5	被熱による変色。外面に保け。輪郭部中位に横大縫。
D-I 6	覆土	土師器	壺	—	—	—	鉄粒・角凹・ 石面	褐	口縁部はわずか上方に突起。口縁部は内窓。内面部放射状のミガキ。	破片	所蓋内窓口縁部。下層出土。口径約14cm程度。
D-3 1	覆土	土師器	小型壺	12.5	4.3	7.1	鉄粒	褐	鋸形。平底。單式で焼成前の穿孔。口縁部外面浅いヨコナダ。胴部内面底に不整ナダ。	完形	外面に黒斑。
D-6 1	床底	土師器	壺	8.8	—	[5.4]	赤滑	赤チャ・砂 粒	口縁部内窓。	口縁部のみ 残存	口縁部の一部を欠損。
D-6 2	床底	土師器	壺	—	—	[8.6]	鉄粒・砂粒	白滑	わずかに下膨れ。外底部中央が円弧(直徑約19cm)に凹む。胴部外壁はミガキの下地にヘタケズリ。	2/3	外面に黒斑。上半部を欠損。
D-6 3	床底	土師器	壺	16.1	—	[5.0]	鉄粒・砂粒	白滑	口縁部は外反気味。外面部ナダは浅い柔軟作。	口縁部のみ 残存	器内面やや摩耗。口縁部の一部を欠損。
W-I 1	覆土	陶器	筒皿	(13.4)	7.5	4.1	赤滑	淡 黄	口クロ型打成形。底輪。輪軸は全面。高台内底直3カ所	2/3	轟川美濃系。
W-I 2	覆土	陶器	皿	(13.4)	(7.4)	3.0	白滑	白 釉	口クロ型打成形。底輪。輪軸は全面。高台内底直3カ所の内2つが埋理。	1/3	轟川美濃系。
W-I 3	覆土	土師器	カワラ 蓋	(10.9)	5.3	3.1	鉄粒	褐	ロカ口成形。底輪。輪軸は全面。高台内底直3カ所の内2つが埋理。	2/3	内面タール状のヨゴレ。灯明皿として使用か?器内面剥れ。質感。
W-I 4	覆土	石製品	瓦用 模造品	4.1	2.5	0.6	—	—	重さ9.9g。前面に研磨痕。上部に1ヵ所穿孔。孔径1.5mm。	完形	滑石製。
瓦土 1	西区	土師器	壺	(13.1)	—	[4.0]	鉄粒・角凹	褐	口縁部はわずか上方に突出。口縁部は内窓。外面部輪郭部に斜めのミガキ。内面部放射状のミガキ。	1/3	所蓋内窓口縁部。

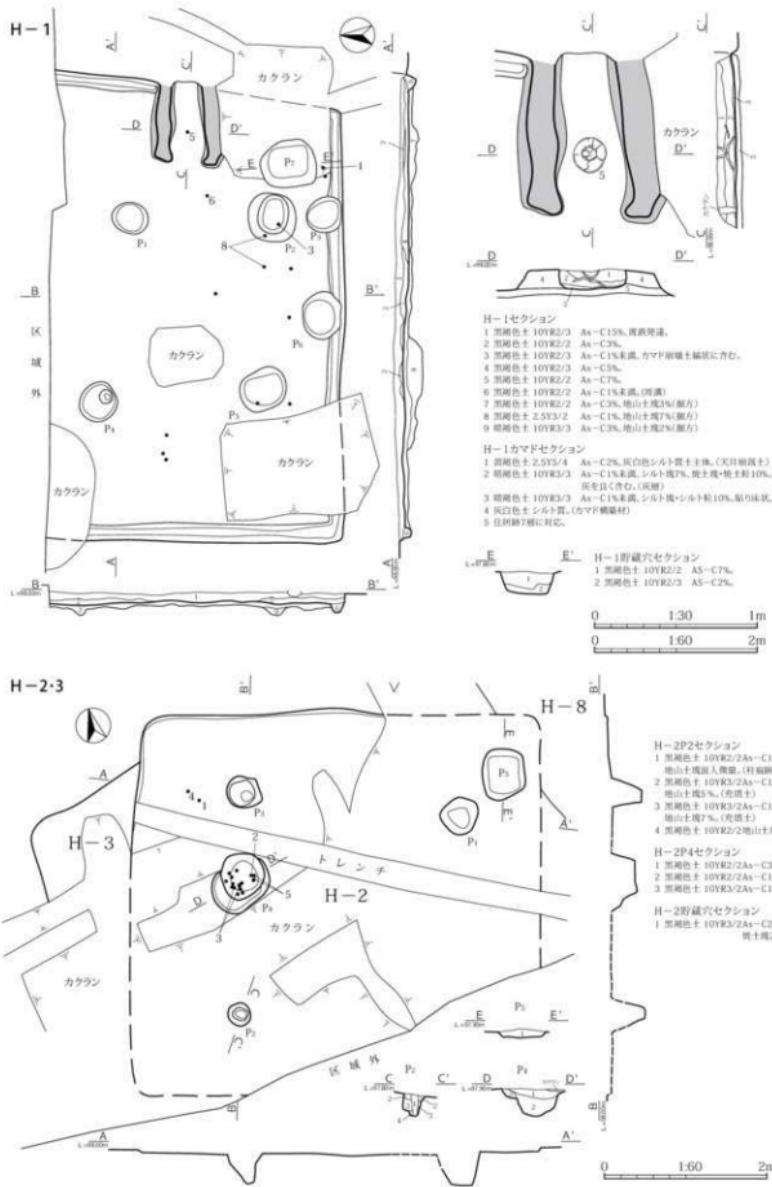


Fig.4 H-1 ~ 3号住居跡

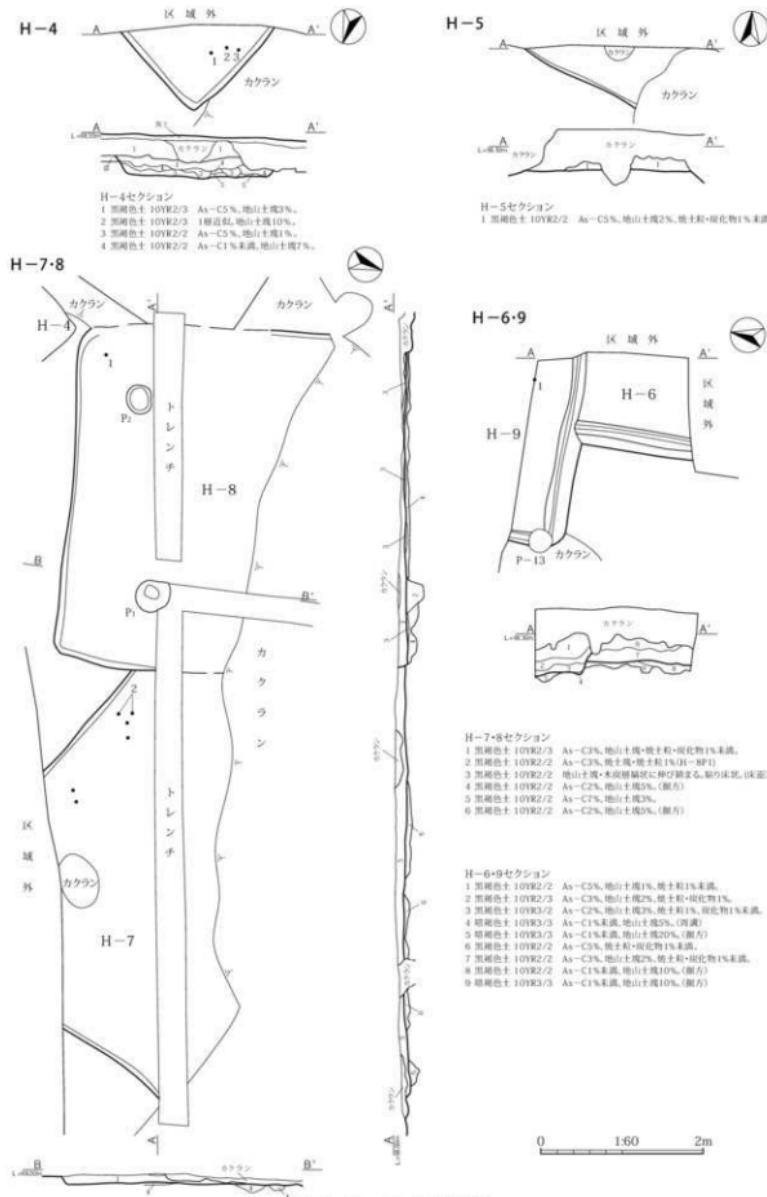


Fig.5 H-4~9号住居跡

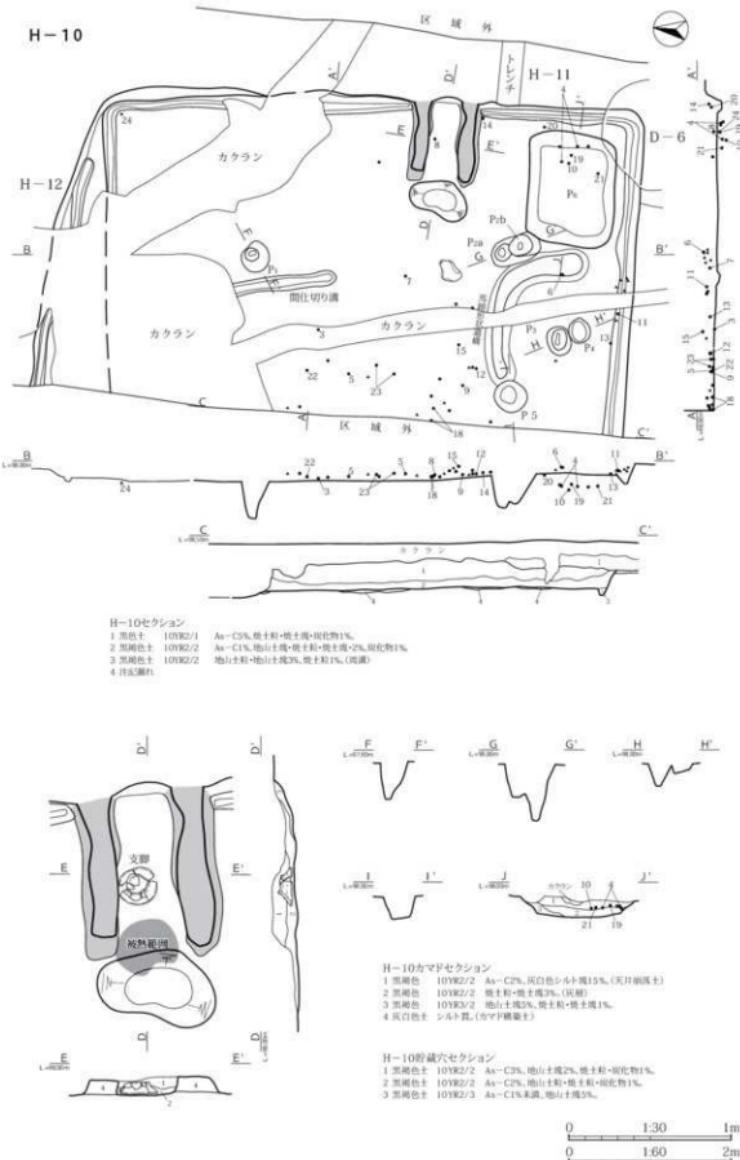
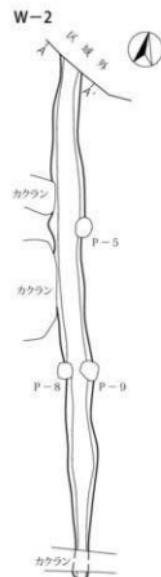
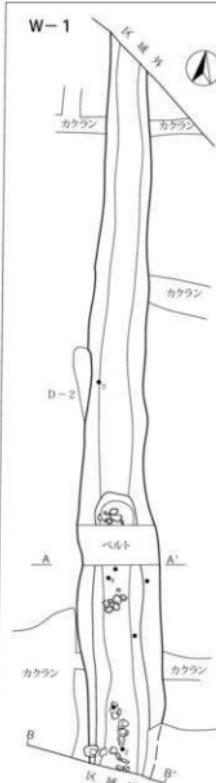
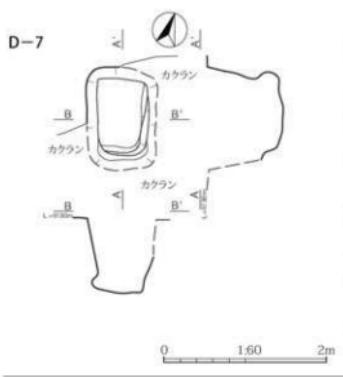
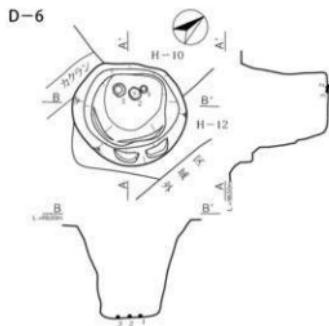
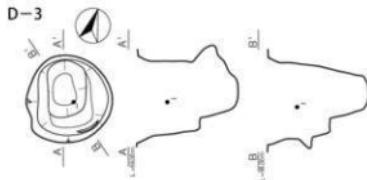
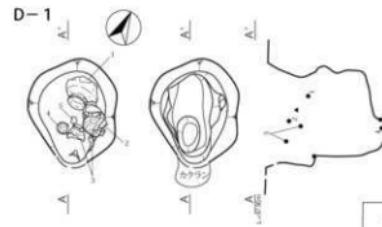


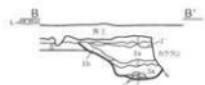
Fig.6 H-10号住居跡



W-2セクション  
I 黒褐色土 10YR2/3 AS-C3%.

W-1セクション

- 1 As-C1%、軽石の混入が少ない。
- 1a 黒褐色土 10YR2/2 As-C3%、地山土質2%。
- 1b 1aの類似、色調は1aと地山土質3%、地生土粘・液化物1%混入。
- 1c 1aの類似、色調は1aと地山土質2%。
- 1d 1aの類似、色調は1a、As-C1%、地山土質2%、地生土粘2%。
- 2 黑褐色土 10YR2/2 As-C1%、CYS、地山土質2%、地生土粘2%。
- 3a 黑褐色土 10YR2/2 As-C1%、地山土質3%、地生土粘2%。
- 3b 3a部をベース、地山土塊を多くむ。
- 4 黑褐色土 10YR2/2 As-C1%未満、地山土質15%、液化物2%。



0 1.80 2m

Fig.7 D-1・3・6・7号土坑、W-1・2号溝

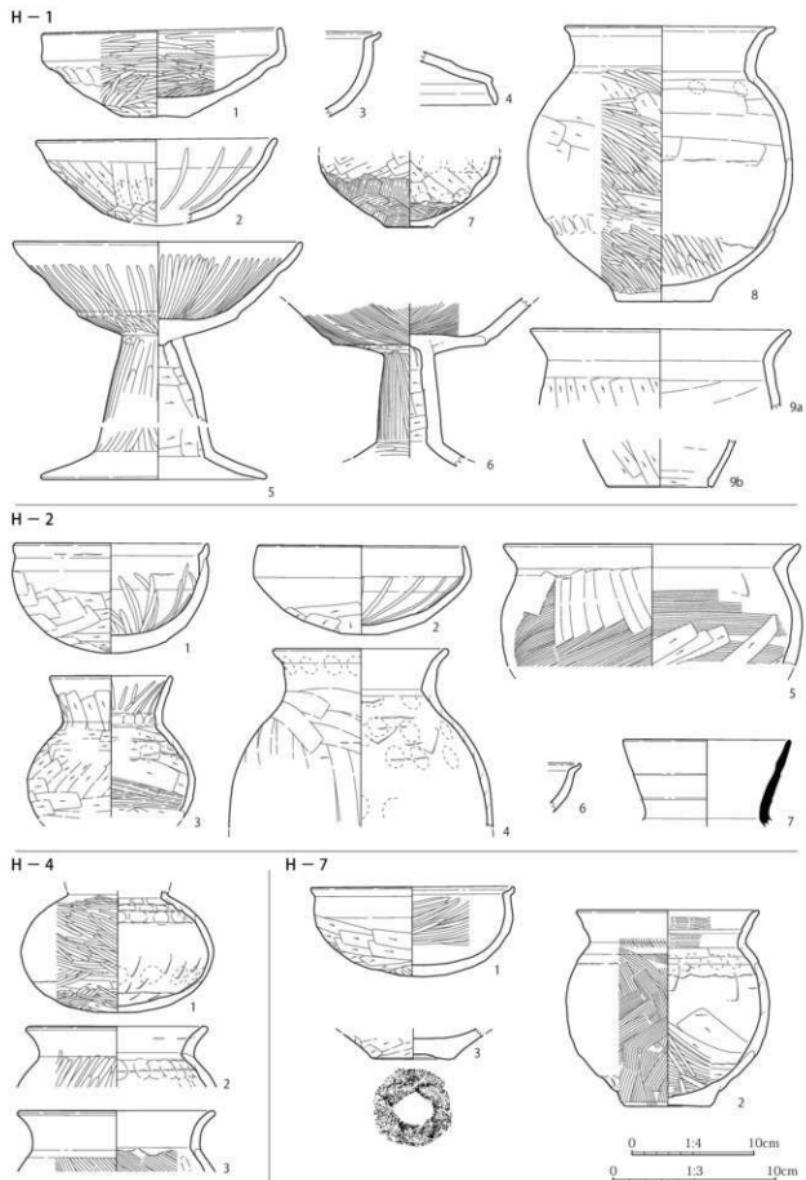


Fig.8 出土遺物 (1)

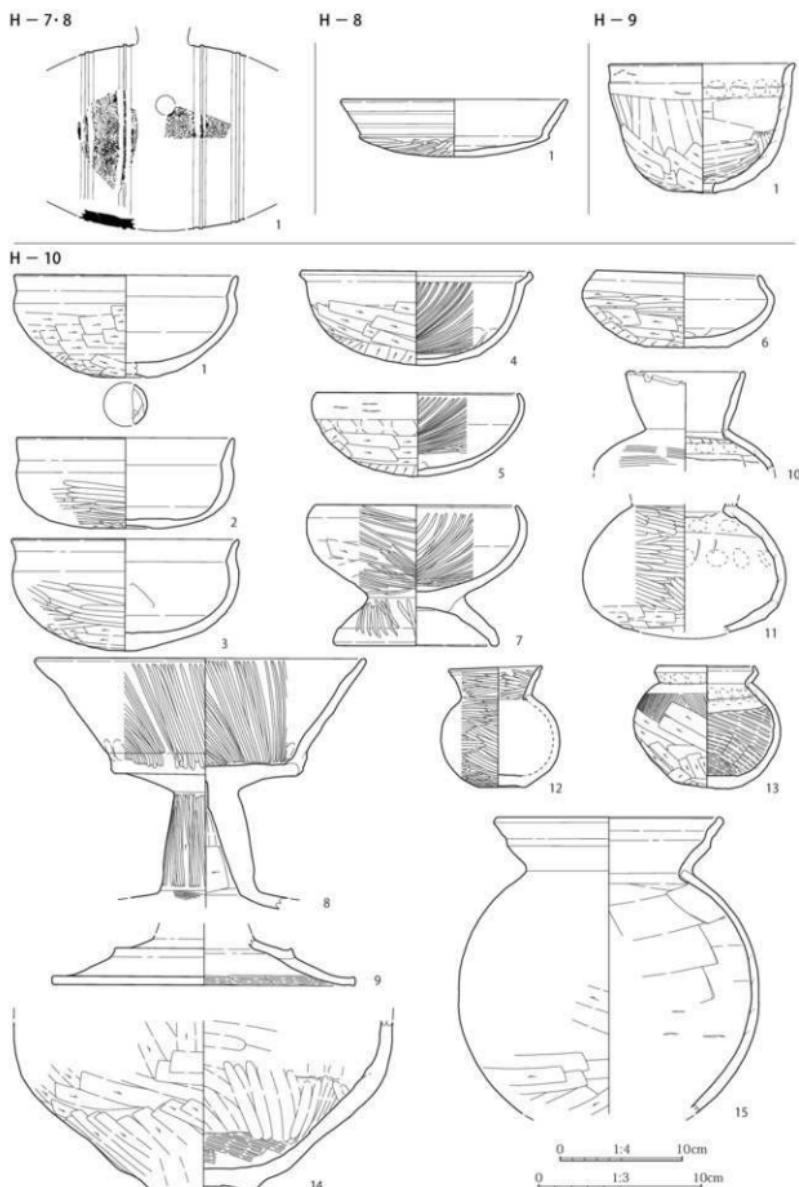


Fig.9 出土遺物 (2)

H - 10

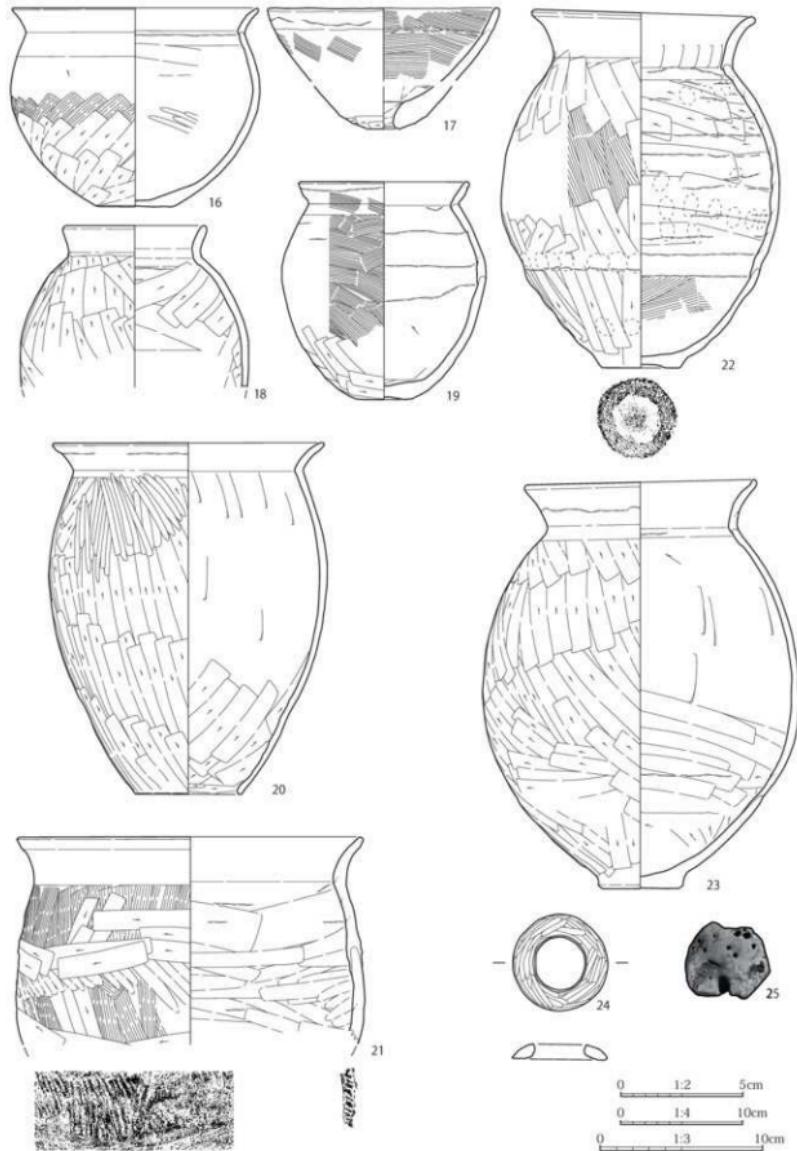
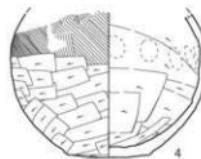
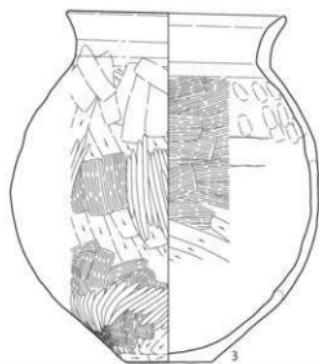
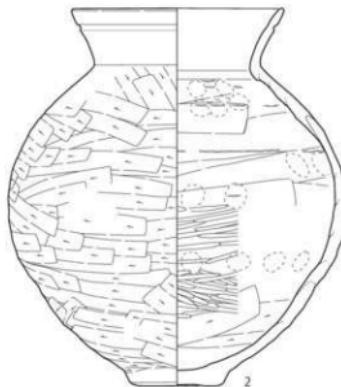
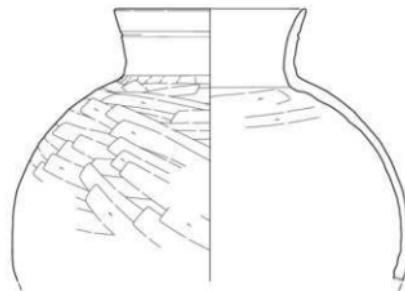


Fig.10 出土遺物 (3)

D - 1



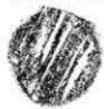
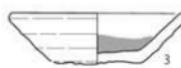
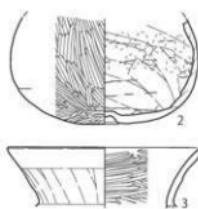
D - 3



W - 1



D - 6



表土

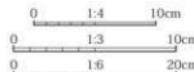
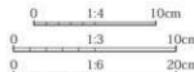
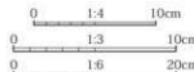
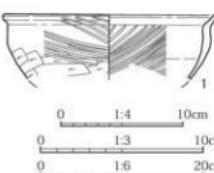


Fig.11 出土遺物 (4)

写 真 図 版



西区全景 西から



H-1 全景 西から



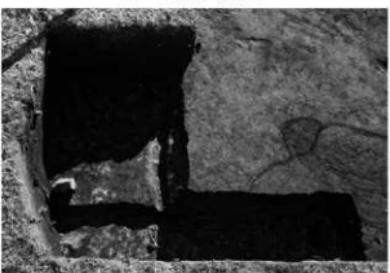
H-1 カマド 西から



H-2 全景 西から



H-4 全景 南から



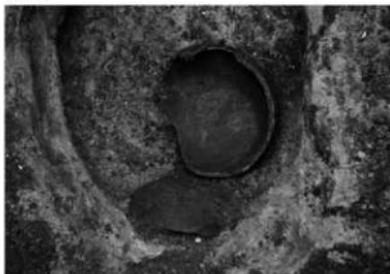
H6・9 全景 北から



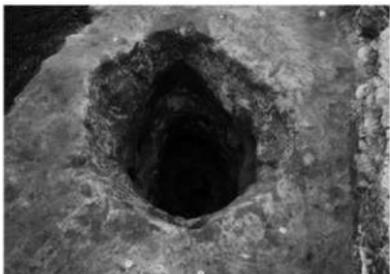
H-10 全景 西から



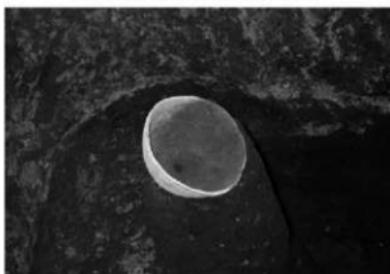
H-10 カマド 西から



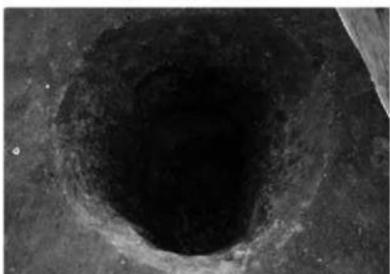
D - 1 床面遺物出土状態 北から



D - 1 全景 北西から



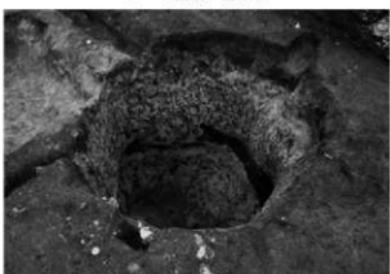
D - 3 遺物出土状態 南西から



D - 3 全景 北から



D - 6 遺物出土状態 南西から



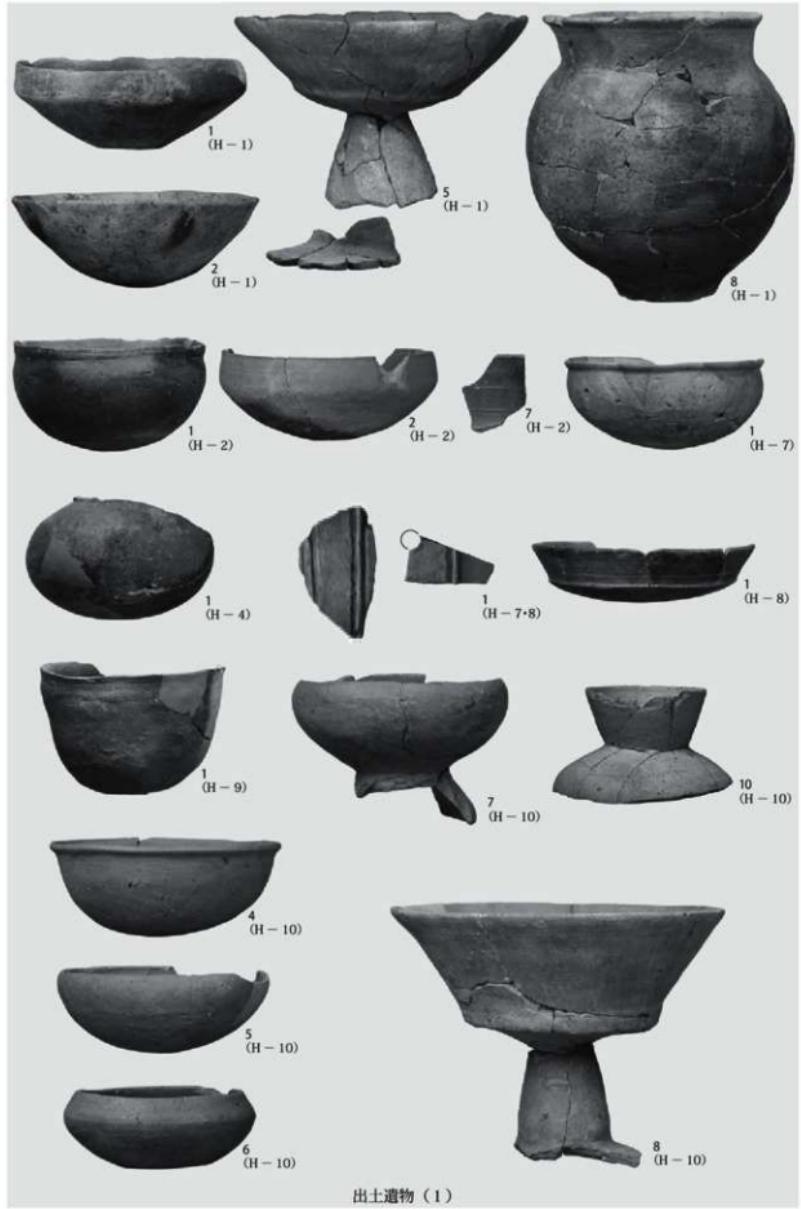
D - 6 全景 南西から



D - 7 全景 東から



W - 1・2 全景 北から



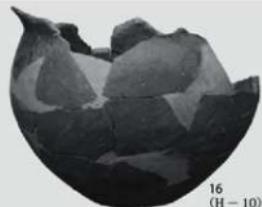
出土遺物（1）



12  
(H - 10)



13  
(H - 10)



16  
(H - 10)



15  
(H - 10)



19  
(H - 10)



21  
(H - 10)

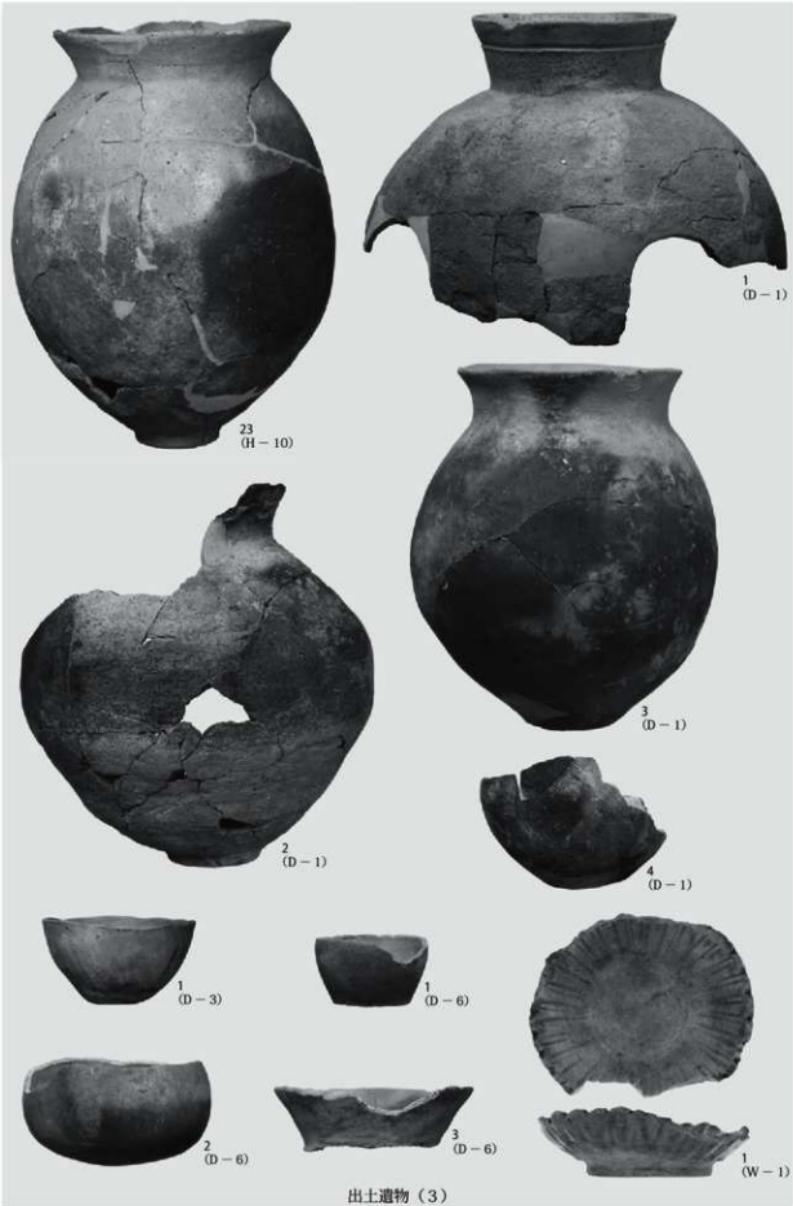


20  
(H - 10)



22  
(H - 10)

出土遺物（2）



## 報告書抄録

ふりがな	ろくくいせきぐん						
書名	六供遺跡群No.7						
副書名	前橋都市計画事業六供土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
編著者名	福田貫之・櫻井和哉						
編集機関	前橋市教育委員会・山下工業株式会社						
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課						
発行機関所在地	群馬県前橋市三俣町2丁目10-2						
発行年月日	2013年2月28日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
六供遺跡群No.7	群馬県前橋市六供町 317-2、317-3、 320-1、320-3、 320-5	10201	24H55	36°22'22" 04'25"	2012.12.12 ~ 2012.12.29	400m <sup>2</sup>	区画整理事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
六供遺跡群No.7	集落跡	古墳時代	住居跡12軒 土坑6基 ピット2基	土師器・須恵器・ 石製模造品	古墳時代中期～後期後期主体。 鉄形石製模造品が出土。		
	その他	近代・現代	溝跡2条 ピット13基	近世陶磁器・かわらけ・ 培塿	17世紀主体。		

### 六供遺跡群No.7

2013年2月21日 印刷

2013年2月28日 発行

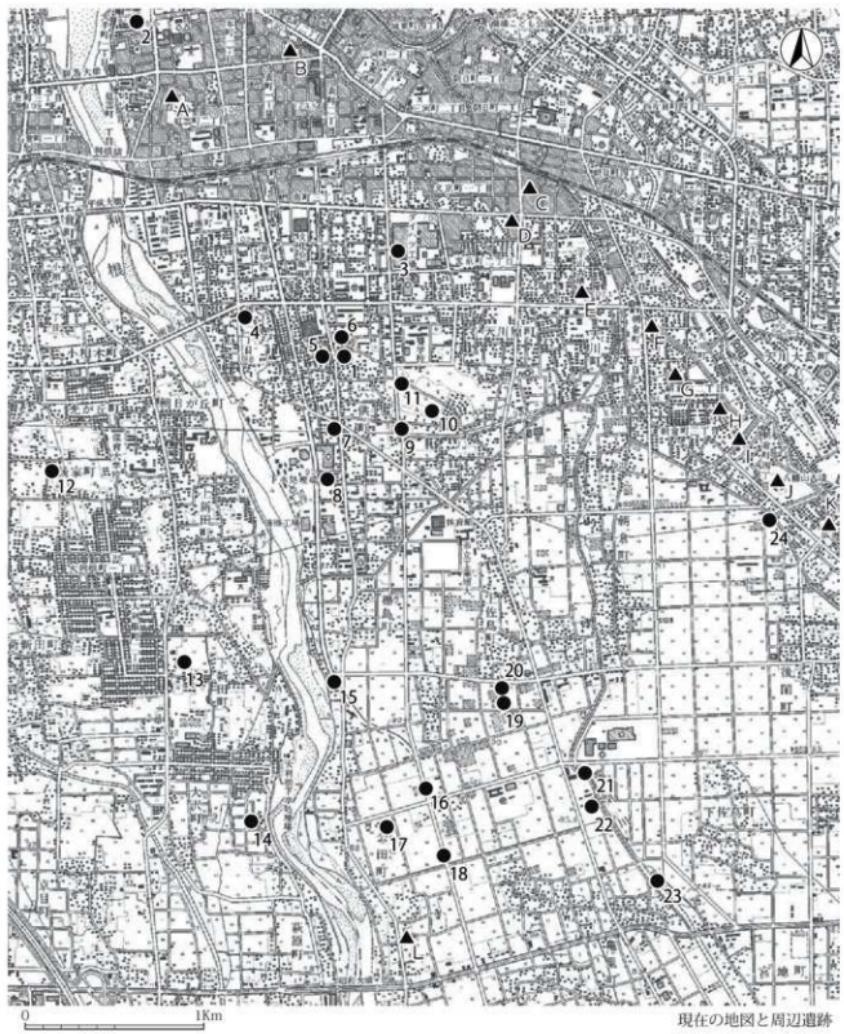
発行 前橋市教育委員会 文化財保護課

前橋市三俣町2丁目10-2

編集 山下工業株式会社

前橋市篠毛石町207-8

印刷 朝日印刷工業株式会社



現在の地図と周辺遺跡

1 六供遺跡群№7	古墳:集落	13 下新田中沖Ⅱ遺跡	古代:水田	A 龍海院裏古墳
2 前橋城Ⅱ	古代:集落	14 萩原町地遺跡	古墳:水田 古代:水田	B 前橋9号古墳
3 文京町№1遺跡	古代:水田	15 糸島・川端跡	弥生:集落 古墳:集落・水田 古代:水田	C 不二山古墳
4 生川遺跡	古墳:集落 古代:集落	16 公田東遺跡(事業団)	古墳:集落・圓溝墓・水田	D カロウツ山古墳
5 六供遺跡群№6	古墳:集落・圓溝墓	17 公田東遺跡(調査会)	古代:水田	E 二子山古墳
6 六供遺跡群№5	古墳:集落	18 公田池尻遺跡	古墳:集落・水田 古代:水田	F 小旦那古墳
7 六供中京安寺遺跡	古墳:周溝墓・古墳 古代:集落	19 上佐鳥中原前遺跡	古代:水田	G 朝倉Ⅱ号墳
8 中大門遺跡	古代:水田	20 上佐鳥中原前Ⅱ遺跡	古代:水田	H 朝倉1号墳
9 六供東京安寺遺跡	古墳:集落 古代:集落	21 下佐鳥遺跡	古墳:集落	I 朝倉Ⅲ号墳
10 六供下堂Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳:集落・水田 古代:集落	22 朝賀工業団地遺跡群	古墳:集落・水田 古代:集落・水田	J 八幡山古墳
11 六供下堂Ⅲ遺跡	古代:集落・水田	23 川曲遺跡	古墳:集落	K 天神山古墳
12 五反田遺跡	古代:水田	24 後園町地遺跡	古墳:集落 古代:集落	L 下川瀬3号古墳